

財団大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第31集

玉 櫛 遺 跡

—— 大阪府営茨木玉櫛住宅建て替えに伴う発掘調査報告書 ——

—— 本文編 ——

1998年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

玉 櫛 遺 跡

— 大阪府営茨木玉櫛住宅建て替えに伴う発掘調査報告書 —

— 本文編 —

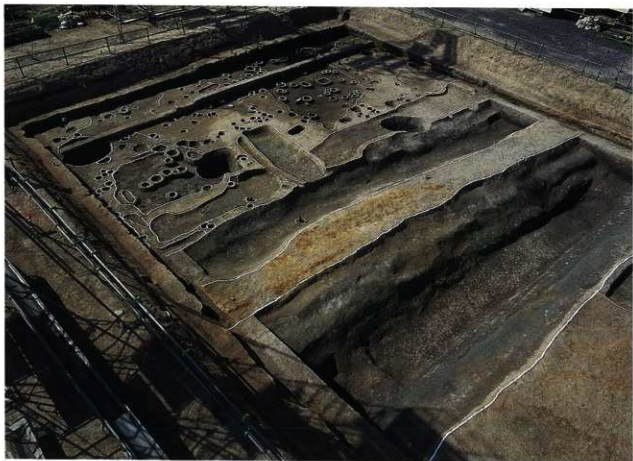
1998年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

巻頭図版 1



調査区遠景（南から）



3 A区第4遺構面全景

卷頭図版 2



2 A区第6遺構面全景



4 A区第4遺構面全景



土器溜54出土山吹双鳥文鏡



1. 井戸1226出土土器

2. 土器溜54出土土器

序 文

玉櫛遺跡は大阪府の北東部、三島平野の中央部に位置する遺跡である。安威川、茨木川などの氾濫によって形成された沖積平野に立地し、早くから茨木川の水運を生かして開けていた地域であり、近隣には弥生時代から続く東奈良遺跡など著名な遺跡が存在している。

以前にも玉櫛遺跡は大阪府教育委員会によって調査が行われており、平安時代から鎌倉時代の集落や水田跡、墓が発見されている。今回、大阪府営茨木玉櫛住宅の建て替えに伴って、大阪府建築部住宅建設課の依頼と大阪府教育委員会の指導の下、当センターが1995年度と1997年度にわたって約3200㎡の発掘調査を実施したものであります。

その結果、平安時代末から室町時代を中心とする中世の集落や墓域、水田などを良好な状態で検出、貴重な資料を多数得ることができた。集落は堀に囲まれた大規模なもので長期間継続しており、出土資料の豊富さ、卓越性からも在地領主層の集落と判断できる。また、墓域の桶棺から座棺の状態で人骨が発掘され、人類学的にも、当時の葬送法を知る上でも貴重である。考古学的には従来余り知られていなかった北摂津南部域の、在地領主層の実態やその生活を解明する上での重要な資料となるでしょう。

これもひとえに、大阪府教育委員会、大阪府建築部、その他関係諸機関の御指導・御協力の賜物と感謝している。今後とも当センターへご支援賜るよう宜しくお願い申し上げます。

平成10年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 坪井清足

例 言

- 1 本書は、大阪府茨木市玉櫛1丁目所在、玉櫛遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は大阪府営茨木玉櫛住宅建て替えに伴うもので、大阪府建築部住宅建設課の委託を受け、1995年度・1997年度に発掘調査事業を、1997年度に遺物整理事業を、財団法人大阪府文化財調査研究センターが行った。
- 3 発掘調査および遺物整理作業は以下の体制で行った。

1995年度 発掘調査事業

調査部	部長	井藤 徹
調整課	参事兼調整課長	中西 靖人
調整係	係長	福田 英人
北部調査事務所	所長	玉井 功
調査第1係	係長	小野 久隆
	主査	入江 正則 (調査担当)
	技師	川瀬 貴子 (")

1997年度 発掘調査及び遺物整理事業

調査部	部長	井藤 徹
調整課	参事兼調整課長	中西 靖人
調整係	係長	福田 英人
北部調査事務所	所長	玉井 功
調査第1係	係長	西口 陽一
	技師	川瀬 貴子 (調査、整理担当)
	専門調査員	木村 健明 (")

- 4 本報告書作成にあたっては、第4章以外は川瀬・木村が執筆を分担し、編集は川瀬が担当した。執筆の分担は第1章第2節、第3章が木村、それ以外は川瀬が執筆した。第4章は各節の文頭に執筆者名をあげた。また、本報告書に掲載した遺構写真は各担当者が、遺物写真は平井貞子が撮影した。
- 5 自然科学調査の成果については、以下の方々に依頼し、原稿を賜った。記して厚く感謝の意を表する。

花粉、珪藻分析	田中 義文、伊藤 良永、辻本 裕也 (パリオ・サーヴェイ株式会社)
胎土分析	井上 巖 (財第四紀地質研究所)

人骨鑑定	安部 みき子（大阪市立大学医学部） 撫養 建至（河内長野市立滝畑民俗資料館）
植物遺体鑑定	山口 誠治（財大阪府文化財調査研究センター）
昆虫遺体鑑定	富永 修、金沢 至、宮武 頼夫、初宿 成彦、昆虫化石研究グループ （大阪市立自然史博物館）
樹種鑑定	財元興寺文化財保存研究所
石材鑑定	井本 伸廣（京都教育大学）
和鏡鑑定	前田 洋子（大阪市立博物館）
地震痕跡分析	寒川 旭（通産省工業技術院地質調査所）

- 6 発掘調査および遺物整理作業の過程で以下の方々・諸機関に御教示・御指導を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、団体五十音順、団体内五十音順）

奥井哲秀・濱野俊一・宮脇薫（茨木市教育委員会）、阿部幸一・奥和之・尾上実・佐久間貴士（大阪府教育委員会）、河音能平、伊野近富・森島康雄（財京都府埋蔵文化財調査研究センター）、西本安秀（吹田市教育委員会）、橋本久和（高槻市教育委員会）、高橋学（立命館大学）

また当センター市本芳三、岡本圭司、西口陽一からも様々な教示・助言を得た。

- 7 発掘調査および遺物整理作業では以下の方々の協力を得た。（五十音順）

今田明子、遠藤啓輔、大柏知美、大島美希、大西邦明、大橋恵美、奥田純一、奥田直美、門田学、兼島美帆、久貝洋子、黒田優美、古藤浩美、小森千津子、佐藤美和、四方登志子、伊達憲一、田中正子、谷口倫子、佃諭佳、津田春子、中川博美、中島智之、中田麻矢、中西憲子、永野香、中村美也、波岸初美、二宮栄子、日高圭悟、兵頭功、前田千津子、松岡聖美、松野正幸、八十千里、山本命、渡辺佳名

- 8 出土遺物・写真・図面等は当センターで保管している。広く利用されることを願う。

凡 例

- 1 遺構や断面図中の標高は、東京湾標準潮位（T.P.）を使用している。
- 2 本報告書で使用する地区割りは国土座標第Ⅵ座標系に基づく表記である。本報告書で使用した北はすべて座標北を示す。
- 3 遺構番号は検出順に1から番号を与えた。遺構名称は遺構の性格を表す日本語名称に検出した際の番号をつなげて表記する。従って井戸1，土坑2，溝3，井戸4…というようになっている。
- 4 遺物番号は挿図・観察表・写真図版に共通する通し番号を与えている。遺物写真図版ではゴチック数字が遺物番号を表し、明朝数字は写真のカット番号を表す。
- 5 遺物実測図は土器が1/4、石器が2/3、石製品1/2、木製品1/4、漆器1/3、金属製品2/3、瓦1/4を基本とする。ただし、一部の遺物は必ずしもこの限りでない。各々の縮尺率については各スケールに縮尺率を明示しているのでそちらを参照されたい。
- 6 引用文献・参考文献は各節か各項の末尾に記した。
- 7 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所票監修1995年版に準拠した。

玉櫛遺跡発掘調査報告書

中表紙	
巻頭図版	
序文	
例言	
凡例	

本文目次

第1章 調査の前提	1
第1節 調査にいたる経過、既往の調査	1
第2節 遺跡の位置と環境	3
第3節 調査方法	6
第4節 調査の経過	8
(1) 1995年度の調査	8
(2) 1997年度の調査	9
第2章 1995年度の調査成果	10
第1節 基本層序	10
第2節 遺構	15
(1) 1A区の遺構	15
1) 第2遺構面の遺構	15
2) 第3遺構面の遺構	15
3) 第4遺構面の遺構	19
4) 第5遺構面の遺構	25
5) 第6遺構面の遺構	31
6) 第7遺構面の遺構	34
(2) 2A区の遺構	36
1) 第2遺構面の遺構	36
2) 第3遺構面の遺構	36
3) 第4遺構面の遺構	43
4) 第5遺構面の遺構	45
5) 第6遺構面の遺構	56
(3) 3A区の遺構	58

1) 第2遺構面の遺構	58
2) 第3遺構面の遺構	58
3) 第4遺構面の遺構	64
4) 第5・第6遺構面の遺構	73
5) 第7遺構面の遺構	84
6) 第8遺構面の遺構	86
7) 第9遺構面の遺構	86
(4) 4A区の遺構	89
1) 第2遺構面の遺構	89
2) 第3遺構面の遺構	93
3) 第3-b・第4遺構面の遺構	93
4) 第5遺構面の遺構	101
5) 第6遺構面の遺構	101
6) 第7遺構面の遺構	105
第3節 遺物	106
(1) 土器・土製品	106
1) 1A区の土器	106
2) 2A区の土器	112
3) 3A区の土器	120
4) 4A区の土器	133
(2) 石製品	139
(3) 木製品	152
1) 1A区の木製品	152
2) 2A区の木製品	158
3) 3A区の木製品	168
4) 4A区の木製品	172
(4) 金属製品	174
(5) 瓦	180
第3章 1997年度の調査結果	181
第1節 基本層序	181
第2節 遺構	184
(1) 第1遺構面の遺構	184
(2) 第2遺構面の遺構	186
(3) 第3遺構面の遺構	190
(4) 第4遺構面の遺構	193

(5) 第5遺構面の遺構	200
(6) 第6遺構面の遺構	201
(7) 第7遺構面の遺構	204
(8) 第8遺構面の遺構	204
第3節 遺物	206
(1) 土器	206
(2) 木製品	210
第4章 自然科学分析	212
第1節 花粉珪藻分析	212
第2節 胎土分析	233
第3節 桶棺墓出土人骨について	242
第4節 出土植物遺体について	245
第5節 玉櫛遺跡の昆虫遺体	248
第5章 まとめ	252
第1節 各地区遺構面の対応	252
(1) 対応する遺構面	252
(2) 集落の変遷—屋敷地の変遷過程	254
(3) 水田遺構の考察	259
第2節 摂津における中世土器の変遷	261
(1) 出土土器の特徴	261
(2) まとめ—器種組成と生産地の変遷—	264
第3節 玉櫛遺跡出土漆器について	271

巻頭原色図版目次

原色図版1 (上) 調査区遠景 (南から)
(下) 3A区第4遺構面全景
原色図版2 (上) 2A区第6遺構面全景
(下) 4A区第4遺構面全景
原色図版3 土器溜54出土山吹双鳥文鏡
原色図版4 (上) 井戸1226出土土器
(下) 土器溜54出土土器

図 版 目 次

図版1 1A区第3遺構面

1. 全景（東から）
2. 全景（南西から）
3. 全景（北から）
4. 溝2410（南から）

図版2 1A区火葬墓

1. 火葬墓2145遺物出土状況
2. 火葬墓2145完掘状況
3. 1A区墓域付近の石列
4. 火葬墓2144遺物出土状況
5. 火葬墓2144完掘状況
6. 溝2410五輪塔出土状況

図版3 1A区第4遺構面

1. 全景（南西から）
2. 全景（西から）
3. 東半部近景（北から）
4. 近景（西から）

図版4 1A区桶棺墓2555

1. 人骨出土状況
2. 棺桶側板
3. 側板周辺の竹検出状況

図版5 1A区桶棺墓2554

1. 蓋板検出状況
- 2・3. 人骨・遺物検出状況
4. 側板周辺の竹検出状況

図版6 1A区箱棺墓2644・箱棺墓2914

- 1・2. 箱棺墓2644
- 3・4. 箱棺墓2914

図版7 1A区第6遺構面

1. 全景（東から）
2. 全景（北東から）
3. 全景（東から）

図版8 1A区第6遺構面

1. 1A区落込3596杭検出状況
2. 1A区噴砂
3. 土坑3592遺物出土状況
4. 1A区井戸3635
5. 1A区噴砂
6. 土坑3592付近録検出状況

図版9 1A区第7遺構面

1. 全景（北東から）
2. 建物復元状況

図版10 2A区第3遺構面

1. 全景西半部（南東から）
2. 全景東半部（南から）

図版11 2A区第3遺構面

1. 畝溝（南東から）
2. 西側鋤溝（南から）
3. 井戸2599上段側板を半分はずした状況
4. 井戸2599中段

図版12 2A区第4遺構面

1. 全景（南から）
2. 全景（東から）
3. 土坑2773遺物出土状況

図版13 2A区第5遺構面

1. 全景（東から）
2. 溝3210断面
3. 溝3210

図版14 2A区第5遺構面

1. 土坑3025下駄出土状況
2. 溝3027遺物出土状況
3. 土坑3031遺物出土状況
4. 溝3178木製品出土状況

図版15 2A区第6遺構面

1. 全景（南から）
2. 井戸3820遺物出土状況
3. 溝3179遺物出土状況
4. 近景（南から）

図版16 3A区第3遺構面

1. 土坑133遺物出土状況
2. 土坑71遺物出土状況
3. 全景（東から）
4. 西半部（北から）

図版17 1A区・3A区土器溜54

1. 3A区近景(北から) 2. 1A区近景(西から) 3. 山吹双鳥文鏡検出状況
4. 土器検出状況 5. 青磁皿検出状況
- 図版18 3A区井戸58・土坑60
1～5. 井戸58 6. 土坑60 7. 土坑60南西隅土器皿検出状況
- 図版19 3A区第4遺構面
1. 全景(南西から) 2. 全景(西から) 3. 落込532
- 図版20 3A区溝203・溝204
1. 溝203・溝204 2. 溝203断面 3. 溝203(南から) 4. 溝204(南から)
- 図版21 3A区第5遺構面
1. 全景(西から) 2. 近景(西から) 3. 近景(南から)
- 図版22 3A区土坑1500・井戸1226
1・2. 土坑1500遺物出土状況 3. 土坑1500完掘状況
4. 井戸1226曲物井戸枠 5. 井戸1226最下層山茶碗検出状況 6. 井戸1226完掘状況
- 図版23 3A区井戸1241・井戸1444
1. 井戸1241 2. Pit柱検出状況 3. 柱穴検出状況
4. 井戸1444 5. Pit1665 6. 井戸1241断面
- 図版24 3A区第6遺構面
1. 全景(西から) 2. 建物復元状況(南から)
- 図版25 3A区第7遺構面
1. 全景(西から) 2. 畦畔および足跡検出状況 3. 畦畔1869断面 4. 畦畔1870断面
5. 畦畔1871断面 6. 足跡 7. 水田検出状況 8. 畦畔検出状況
- 図版26 3A区第7遺構面・4A区第7遺構面
1. 3A区第7遺構面耕作痕検出状況 2. 3A区第7遺構面畦畔検出状況
3～7. 4A区第7遺構面 3. 4A区第7遺構面全景(西から) 4. 4A区足跡(人)
5. 4A区足跡(牛) 6. 畦畔検出状況(西半部) 7. 畦畔検出状況(東半部)
- 図版27 3A区第9遺構面
1. 全景(南西から) 2. 全景(東から)
- 図版28 4A区第2・第3遺構面
1. 西半部(北から) 2. 全景(西から)
- 図版29 4A区第3-b・第4遺構面
1. 第3-b遺構面全景(西から) 2. 第4遺構面全景(南西から)
- 図版30 4A区第4遺構面
1. 溝871木製品検出状況 2・3. 建物復元状況 4. Pit検出状況
- 図版31 4A区第6遺構面
1. 全景(西から) 2. 西半部(南から) 3. 東半部(南から)
- 図版32 4A区第7遺構面
1. 全景(西から) 2. 全景(南東から)
- 図版33 1A区包含層土器

- 图版34 1 A区包含層土器
图版35 1 A区包含層土器
图版36 1 A区土器
图版37 1 A区土器
图版38 1 A区土器
图版39 2 A区包含層土器
图版40 2 A区・3 A区包含層土器
图版41 2 A区河川2597・河川2598土器
图版42 2 A区土器
图版43 2 A区土器
图版44 2 A区溝3210土器
图版45 2 A区溝3210土器
图版46 2 A区土器
图版47 3 A区包含層土器
图版48 3 A区包含層土器
图版49 3 A区包含層土器
图版50 3 A区土器
图版51 1 A区・3 A区土器溜54土器
图版52 1 A区・3 A区土器溜54土器
图版53 1 A区・3 A区土器溜54土器
图版54 1 A区・3 A区土器溜54土器
图版55 3 A区溝203土器
图版56 3 A区土器
图版57 3 A区土坑1500土器
图版58 3 A区土器
图版59 4 A区包含層土器
图版60 4 A区包含層土器
图版61 4 A区土坑124土器
图版62 4 A区土坑124土器
图版63 4 A区土器
图版64 4 A区土器
图版65 4 A区土器
图版66 1 A区石製品
图版67 2 A区・4 A区石製品
图版68 3 A区石製品
图版69 3 A区石製品
图版70 1 A区・3 A区土器溜54石製品
图版71 1 A区木製品

- 図版72 1 A区木製品
- 図版73 1 A区落込3596下駄
- 図版74 1 A区落込3596草履芯
- 図版75 2 A区木製品
- 図版76 2 A区木製品
- 図版77 2 A区溝3210下駄
- 図版78 2 A区井戸3580・土坑3025下駄
- 図版79 2 A区木製品
- 図版80 3 A区井戸1226曲物
- 図版81 3 A区井戸1226曲物
- 図版82 3 A区井戸1226曲物
- 図版83 2 A区井戸3820木製品
- 図版84 2 A区漆器
- 図版85 1 A区・2 A区漆器
- 図版86 2 A区木製品
- 図版87 3 A区木製品
- 図版88 3 A区木製品
- 図版89 3 A区・4 A区木製品
- 図版90 墓棺材
- 図版91 1 A区土器溜54銅鏡
- 図版92 金属製品
- 図版93 金属製品
- 図版94 墓出土銅銭
- 図版95 瓦・瓦質製品・土製品
- 図版96 1 B区第1 遺構面
1. 第1遺構面全景(南から) 2. 第3層鉄刀出土状況 3. 第3層瓦器碗出土状況
- 図版97 1 B区第2 遺構面
1. 全景 2. 溝52遺物出土状況 3. 土坑108遺物出土状況
- 図版98 1 B区第3 遺構面
1. 全景(南から) 2. 土坑193遺物出土状況
3. 土坑135遺物出土状況 4. 土坑136遺物出土状況
- 図版99 1 B区第4 遺構面
1. 南半部(東から) 2. 土坑263遺物出土状況 3. 溝201遺物出土状況
- 図版100 1 B区第5・第6・第7 遺構面
1. 第5遺構面全景(南から) 2. 第6遺構面全景(南から) 3. 第7遺構面全景(南から)
- 図版101 2 B区第1・第2・第4 遺構面
1. 第1遺構面全景(北から) 2. 第2遺構面全景(北から)
3. 第4遺構面全景(南から)

図版102	1 B区・2 B区包含層土器・石製品
図版103	1 B区土器
図版104	1 B区・2 B区木製品
図版105	珪藻化石(1)
図版106	珪藻化石(2)
図版107	花粉化石(1)
図版108	花粉化石(2)
図版109	桶棺墓内出土人骨
図版110	木製品断面(1)
図版111	木製品断面(2)

挿 図 目 次

第1図	玉櫛遺跡調査区位置図	1
第2図	周辺の遺跡分布図	5
第3図	地区割図	6
第4図	基本層序模式図	12
第5図	3 A区南壁断面図	13~14
第6図	1 A区第3遺構面平面図	16
第7図	1 A区第3遺構面溝2064・溝2065断面図	17
第8図	1 A区第3遺構面火葬墓2144・火葬墓2145平面・断面図	18
第9図	1 A区および2 A区地震痕跡	19
第10図	1 A区第4遺構面平面図	20
第11図	掘立柱建物1	21
第12図	掘立柱建物2	22
第13図	1 A区第4遺構面桶棺墓2554・桶棺墓2555平面図	23
第14図	1 A区第5遺構面平面図	26
第15図	1 A区第5遺構面河川2937・溝2945断面図	27
第16図	1 A区第5遺構面箱棺墓2644・箱棺墓2914平面図	29
第17図	1 A区第6遺構面井戸3635平面・断面図	31
第18図	1 A区第6遺構面平面図	32
第19図	1 A区第6遺構面溝3595・落込3596・河川2937・落込3015断面図	33
第20図	1 A区第7遺構面平面図	35
第21図	2 A区第2遺構面平面図	37
第22図	2 A区第3遺構面平面図	38
第23図	2 A区第3遺構面河川2597・河川2598断面図	39
第24図	2 A区第3遺構面井戸2599平面・断面・立面図	40
第25図	2 A区第4遺構面土坑3003遺物出土状況図	43

第26图	2 A区第4 遺構面平面図	44
第27图	2 A区第4 遺構面土坑2773平面・断面図	45
第28图	掘立柱建物4	46
第29图	2 A区第5 遺構面平面図	47
第30图	掘立柱建物3	48
第31图	掘立柱建物5	48
第32图	2 A区第5 遺構面溝3178・溝3179・溝3017・溝3182断面図	49
第33图	2 A区第5 遺構面土坑3025平面・断面図	50
第34图	2 A区第5 遺構面土坑3031平面・断面図、溝3028遺物出土状況図	51
第35图	2 A区第5 遺構面溝3027・溝3028・溝3210断面図	52
第36图	2 A区第5 遺構面溝3210遺物出土状況図	53~54
第37图	2 A区第5 遺構面井戸3645-1・井戸3580平面・断面図	55
第38图	2 A区第6 遺構面井戸3827平面・断面図	56
第39图	2 A区第6 遺構面溝3916断面図	56
第40图	2 A区第6 遺構面平面図	57
第41图	2 A区第6 遺構面井戸3820遺物出土状況図	58
第42图	3 A区第2 遺構面平面図	59
第43图	3 A区第3 遺構面平面図	60
第44图	3 A区第3 遺構面土坑133遺物出土状況・断面図	61
第45图	3 A区第3 遺構面土坑60平面・断面図	62
第46图	3 A区第3 遺構面井戸58平面・断面図	63
第47图	土器溜54山吹双鳥文鏡出土状況図	64
第48图	土器溜54遺物出土状況図	65~66
第49图	3 A区第4 遺構面平面図	67
第50图	掘立柱建物6	69
第51图	掘立柱建物7	69
第52图	掘立柱建物8	70
第53图	掘立柱建物9	70
第54图	掘立柱建物10	70
第55图	掘立柱建物11	71
第56图	3 A区第4 遺構面井戸212平面・断面図	71
第57图	3 A区第4 遺構面遺構平面・断面図	72
第58图	3 A区第5 遺構面平面図	74
第59图	3 A区第6 遺構面平面図	75
第60图	掘立柱建物12・14・13	77
第61图	3 A区第5 遺構面土坑1500平面・断面図	79
第62图	3 A区第5 遺構面井戸1226・井戸1241・井戸1444平面・断面図	80
第63图	3 A区第5 遺構面土坑1622・溝1593・溝1634平面・断面図	81

第64图	3 A区第5 遺構面井戸1734・土坑1455・溝1577平面・断面図	82
第65图	掘立柱建物16・15	83
第66图	3 A区第7 遺構面平面图	85
第67图	3 A区第7 遺構面畦畔断面図	86
第68图	3 A区第9 遺構面平面图	87
第69图	3 A区第9 遺構面遺構平面・断面図	88
第70图	4 A区第2 遺構面平面图	90
第71图	4 A区第3 遺構面平面图	91
第72图	4 A区第3 遺構面土坑124平面・断面・遺物出土状況図	92
第73图	4 A区第3 - b 遺構面平面图	94
第74图	4 A区第4 遺構面平面图	95
第75图	掘立柱建物17・20	96
第76图	掘立柱建物18・19	97
第77图	掘立柱建物21	98
第78图	4 A区第3 - b 遺構面土坑582・溝265平面・断面図	99
第79图	4 A区第5 遺構面平面图	100
第80图	4 A区第5 遺構面畦畔断面図	101
第81图	4 A区第6 遺構面平面图	102
第82图	4 A区第6 遺構面遺構平面・断面図	103
第83图	4 A区第7 遺構面平面图	104
第84图	4 A区第7 遺構面畦畔断面図	105
第85图	1 A区包含層土器 (1)	107
第86图	1 A区包含層土器 (2)	108
第87图	1 A区第4 遺構面遺構土器	109
第88图	1 A区第5 遺構面遺構土器	109
第89图	1 A区河川2937他遺構土器	109
第90图	1 A区第6 遺構面遺構土器	111
第91图	1 A区落込3596土器	112
第92图	1 A区第7 遺構面遺構土器	112
第93图	2 A区包含層土器	113
第94图	2 A区河川2597・河川2598土器	114
第95图	2 A区第4 遺構面遺構土器	114
第96图	2 A区第5 遺構面遺構土器 (1)	116
第97图	2 A区第5 遺構面遺構土器 (2)	117
第98图	2 A区溝3210土器 (1)	118
第99图	2 A区溝3210土器 (2)	119
第100图	2 A区溝3916・井戸3827・井戸3820土器	120
第101图	3 A区包含層土器 (1)	121

第102图	3 A区包含層土器 (2)	122
第103图	3 A区土坑3・土坑4・土坑5土器	124
第104图	3 A区土坑133・土坑60他遺構土器	124
第105图	3 A区土器溜54土器 (1)	125
第106图	3 A区土器溜54土器 (2)	126
第107图	3 A区土器溜54土器 (3)	127
第108图	3 A区土器溜54土器 (4)	128
第109图	3 A区第4遺構面遺構土器	130
第110图	3 A区第5遺構面遺構土器	132
第111图	3 A区第5・第6遺構面遺構土器	133
第112图	3 A区第8・第9・第10遺構面遺構土器	133
第113图	4 A区包含層土器 (1)	134
第114图	4 A区包含層土器 (2)	135
第115图	4 A区土坑124土器	136
第116图	4 A区溝871・溝265・土坑582他遺構土器	137
第117图	4 A区土坑643他遺構土器	138
第118图	4 A区第5遺構面遺構土器	138
第119图	1 A区河川2410五輪塔	139
第120图	1 A区石製品 (1)	140
第121图	1 A区石製品 (2)	141
第122图	2 A区石製品	142
第123图	3 A区遺構石製品	144
第124图	3 A区溝203・溝204・溝205石製品	145
第125图	3 A区石製品 (1)	147
第126图	3 A区石器	148
第127图	3 A区石鍋	148
第128图	3 A区石製品 (2)	149
第129图	3 A区石製品 (3)	150
第130图	4 A区石製品	151
第131图	1 A区河川2410卒塔婆	152
第132图	桶棺墓2555木製品	153
第133图	箱棺墓2644・箱棺墓2914・桶棺墓2554木製品	154
第134图	1 A区落込3015木製品・1 A区漆器	155
第135图	1 A区遺構木製品	156
第136图	1 A区井戸3635井戸枠桶板他	157
第137图	2 A区井戸2599井戸枠桶板	158
第138图	2 A区河川2597・井戸2599・Pit2683木製品	159
第139图	2 A区遺構木製品	160

第140图	2 A区溝3210木製品	162
第141图	2 A区溝3210・Pit3524木製品	165
第142图	2 A区井戸3645-1・井戸3031木製品	166
第143图	2 A区井戸3820・井戸3827木製品	167
第144图	2 A区溝3916・井戸3820漆器	168
第145图	2 A区溝3916木製品	169
第146图	3 A区井戸58井戸枠桶板	170
第147图	3 A区遺構・包含層木製品	171
第148图	3 A区包含層荷札木筒	172
第149图	4 A区遺構木製品	173
第150图	土器溜54山吹双鳥文鏡	174
第151图	金属製品(1)	175
第152图	金属製品(2)	176
第153图	銅銭(1)	177
第154图	銅銭(2)	178
第155图	瓦	179
第156图	1 A区出土瓦管	180
第157图	2 B区北壁断面図	181
第158图	1 B区南壁断面図	182
第159图	2 B区第1遺構面井戸1平面・断面図	184
第160图	1 B・2 B区第1遺構面平面図	185
第161图	1 B区第1遺構面溝6断面図	186
第162图	1 B・2 B区第2遺構面平面図	187
第163图	1 B区第2遺構面平面図	188
第164图	2 B区第2遺構面平面図	189
第165图	1 B区・2 B区第2遺構面遺構平面・断面図	190
第166图	1 B・2 B区第3遺構面平面図	191
第167图	1 B区第3遺構面平面図	192
第168图	1 B区第3遺構面遺構平面・断面図	195
第169图	1 B・2 B区第4遺構面平面図	196
第170图	1 B区第4遺構面平面図	197
第171图	1 B区第4遺構面遺構平面・断面図	198
第172图	1 B・2 B区第5遺構面平面図	199
第173图	1 B区第5遺構面畦畔断面図	200
第174图	1 B・2 B区第6遺構面平面図	201
第175图	1 B区第6遺構面畦畔断面図	202
第176图	1 B区第7遺構面溝断面図	202
第177图	1 B・2 B区第7遺構面平面図	203

第178図	1 B・2 B区第8遺構面平面図	205
第179図	1 B区遺構土器	207
第180図	1 B・2 B区包含層土器・石製品・瓦	208
第181図	1 B・2 B区木製品(1)	210
第182図	1 B・2 B区木製品(2)	211
第183図	花粉珪藻分析試料採取地点	212
第184図	花粉珪藻分析試料採取地点土層断面図	214
第185図	主要珪藻化石群集	221
第186図	主要花粉化石群集	225
第187図	三角ダイヤグラム位置分類図	234
第188図	菱形ダイヤグラム位置分類図	234
第189図	Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム	239
第190図	Mo-Ch、Mi-Hb菱形ダイヤグラム	239
第191図	Qt-Pl図	241
第192図	SiO ₂ -AlO ₂ 図	241
第193図	Fe ₂ O ₃ -MgO図	241
第194図	K ₂ O-CaO図	241
第195図	歯冠の検出状況	243
第196図	骨の検出状況	244
第197図	各調査区の対応一覧	253
第198図	玉櫛遺跡集落変遷図	255
第199図	現行条里地割と玉櫛遺跡検出条里遺構	259
第200図	玉櫛遺跡出土瓦質土器	262
第201図	溝3210出土土師皿の分類	263
第202図	遺構出土土器器種別分類	266
第203図	遺構出土土器種類別分類	266
第204図	玉櫛遺跡出土土器(1)	267~268
第205図	玉櫛遺跡出土土器(2)	269~270
第206図	玉櫛遺跡出土漆器	274

付 表 目 次

第1表	玉櫛遺跡発掘調査一覧表	2
第2表	桶棺墓2554・桶棺墓2555側板・竹計測表	24
第3表	玉櫛遺跡出土墓一覧表	30
第4表	井戸3635井戸枠桶板計測表	31
第5表	井戸2599井戸枠桶板計測表	41~42
第6表	井戸58井戸枠桶板計測表	62

第7表	箸計測表	161
第8表	珪藻の生態性	215
第9表	珪藻分析結果(1)	216
第10表	珪藻分析結果(2)	217
第11表	珪藻分析結果(3)	218
第12表	珪藻分析結果(4)	219
第13表	珪藻分析結果(5)	220
第14表	花粉分析結果	224
第15表	タイプ分類一覧表	234
第16表	胎土性状表	236
第17表	化学分析表	237
第18表	骨及び歯冠の検出状況	243
第19表	植物遺体同定表(1)	246
第20表	植物遺体同定表(2)	247
第21表	玉櫛遺跡出土の昆虫遺体	251
第22表	遺構出土土器種類別分類	265
第23表	遺構出土土器種類別分類	265
第24表	玉櫛遺跡出土漆器一覧	272~273
第25表	建物一覧表	275
第26表	井戸一覧表	276
第27表	土器・土製品観察表	277~314
第28表	石製品観察表	315~317
第29表	木製品観察表	318~324
第30表	金属製品観察表	325~326
第31表	瓦・瓦製品観察表	327

抄録

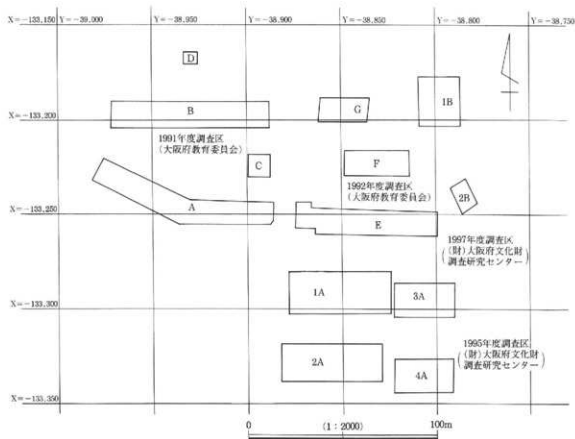
第1章 調査の前提

第1節 調査にいたる経過、既応の調査

平成2年度大阪府教育委員会は大阪府建築部住宅建設課の依頼をうけて、茨木市玉櫛1丁目の大阪府営茨木第3住宅の建て替えの事前に試掘調査を行った。

その結果、すべてのトレンチで瓦器・須恵器などの遺物が出土し、また、水田や河川を確認したために、新規発見の遺跡として周辺一帯は玉櫛遺跡と命名され、大阪府教育委員会によって、平成3年度に第1次調査が、平成4年度に第2次調査が実施された。

平成3・4年度の大阪府教育委員会の調査では、合計7つのトレンチ、約5000m²を調査し、各トレンチにわたって4～5遺構面が確認されている。7つのトレンチにわたって中世～近世の水田や平安時代末の集落、古墳時代の河川などが検出された。特筆すべき遺構としては平安時代末の木棺墓や祭祀遺構がある。木棺墓は長短軸の椀木に脚をつけ、上部は曲物という特殊な形態のもので、筆箱と土師皿、数珠が副葬されていた。既往の調査成果からは玉櫛遺跡は古墳時代後期に開発が始まり、10世紀中頃には水田が形成され、その後茨木川の氾濫によって一時水田は荒廃するものの11世紀後半以降、再び水田が形成され、14世紀まで水田と集落、屋敷墓等が形成されることが判明している。調査担当者の見解としては検出した畦畔や溝の条里遺構から条里地割の施行開始時期を10世紀前半とし、また、建物の規模や木棺墓の遺物などから玉櫛遺跡の主体を在地領主層下で耕作にあたった小名主層と考えている。



第1図 玉櫛遺跡調査区位置図

平成4年度までの調査では畑や水田、河川など玉櫛遺跡の主に生産地域を検出したと言えよう。大阪府教育委員会の調査の成果は『玉櫛遺跡発掘調査概要・Ⅰ』¹⁾にまとめられている。

平成7年度、平成4年度調査区の南に隣接する部分で住宅4棟の建て替えを行うにあたって、大阪府教育委員会の指導のもと、財大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を行った。総面積2800㎡、4つの調査区を2つずつ、2期にわけて約9ヶ月をかけて調査を実施した。また、発掘作業と併行して遺物整理作業も行った。

1年強の中断を経て平成9年度、平成7年度調査区の東にあたる部分で、府営住宅の集会所、防火水槽施設建築のために、再び財大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施した。2つの調査区をあわせた調査面積は約400㎡である。調査は約3ヶ月かけて行われ、1998年1月には全ての調査が完了した。

財大阪府文化財調査研究センターが行った調査では玉櫛遺跡の集落を検出し、玉櫛遺跡の集落がより南に広がっていたことを明らかにした。また、その規模が大きくかつ長期的に存続することも明らかになった。

平成9年度調査区の遺物整理も発掘調査と同時併行で行われ、当センター発掘調査の報告は2ヶ年分をあわせて、平成9年度末にはこの『玉櫛遺跡発掘調査報告書』として編集、刊行するに至った。

註

- 1) 『玉櫛遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 1993 大阪府教育委員会

第1表 玉櫛遺跡発掘調査一覧表

調査年度	建設施設	区名	総面積	調査主体	調査担当者
平成3年度 (1991年度)	住宅2棟他	A～D	約2650㎡	大阪府教育委員会	広瀬雅信・地村邦夫
平成4年度 (1992年度)	住宅3棟	A～G	約2400㎡	大阪府教育委員会	阿部幸一・藤田道子
平成7年度 (1995年度)	住宅4棟	1A～4A	約2800㎡	(財)大阪府文化財 調査研究センター	入江正則・川瀬貴子
平成9年度 (1997年度)	集会所施設他	1B～2B	約400㎡	(財)大阪府文化財 調査研究センター	川瀬貴子・木村健明

第2節 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

玉櫛遺跡の所在する茨木市は、大阪府北部に位置している。市域は南北に長く、北半部は丹波高地の南端にあたり、北摂山地と称されている山地・丘陵である。山地の裾部には、低位段丘が発達している。南半部は淀川・安威川・佐保川・勝尾寺川・茨木川（現在廃川）などの河川によって形成された扇状地及び沖積平野が広がり、三島平野と呼称されている平野を形成している。周辺の市町としては、東に高槻市、南及び南西に摂津市と吹田市、西及び北西に箕面市と豊能町が隣接している。北は、一部がそのまま京都府との境界になっており、亀岡市と接している。玉櫛遺跡は茨木川と安威川によって形成された沖積平野に位置して、茨木川の左岸に広がる後背湿地に営まれていた。現在の標高は、T.P. + 6.5m前後である。茨木川の対岸には、銅鐸鈿型の出土したことで有名な東奈良遺跡がある。

(2) 歴史的環境

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は、山麓部の初田遺跡、丘陵裾部の太田遺跡・耳原遺跡・郡遺跡・東奈良遺跡などで表面採集や後世の遺物包含層中からナイフ形石器・有舌尖頭器が、単独ないし数点発見されている。

縄文時代 縄文時代の遺跡は、市内では遺物の発見数は増えてきているが、明確な遺構の検出されている遺跡は、まだ少ない。遺構の検出されている遺跡としては、耳原遺跡がある。後期から晩期にかけての遺構、遺物が検出されており、特に晩期には滋賀里Ⅲ式期から長原式期までの甕棺墓が16基検出されている。さらに牟礼遺跡では、自然流路及び井堰、水田が検出されており、自然流路からは、晩期（滋賀里Ⅲ～Ⅳ式・船橋式・長原式）の土器が出土している。他の遺跡では、東奈良遺跡において、前期末の大歳山式やC字爪形文土器、晩期後半の大洞AないしA'式の浮線文土器・船橋式と長原式の深鉢片、石棒が出土している。また郡遺跡では石刀が出土している。

弥生時代 弥生時代の遺跡は、前期ではまず低湿地に近い東奈良遺跡・目垣遺跡が形成され、前期末には耳原遺跡・郡遺跡にも集落が形成される。特に東奈良遺跡は、高槻市安満遺跡と同じく北摂地域における代表的な拠点集落であり、銅鐸鈿型の出土により中期後半には、青銅器生産が行われていたことが判明している。東奈良遺跡で作られた銅鐸は、兵庫県豊岡市気比3号銅鐸と大阪府豊中市桜塚銅鐸・香川県善通寺市我拝師山銅鐸（後の2個は河内銅鐸）の3個が見つまっている。

中期及び後期になると、主要河川（安威川・佐保川・勝尾寺川）の両側、丘陵部、山間部などに新たに集落が形成され、遺跡数の急増が認められる。また東奈良遺跡や郡遺跡などの拠点集落では、周囲に小規模な集落が多数存在する。新たに形成される集落としては、見付山遺跡・太田遺跡・溝作遺跡や、高地性集落である石堂ヶ丘遺跡などがある。また、東奈良遺跡の周囲には中条小学校遺跡、郡遺跡の周囲には中河原遺跡・倍賀遺跡・春日遺跡などが存在している。

古墳時代 古墳時代の遺跡は、山麓部と千里丘陵の裾部に多く築造されている古墳と集落遺跡とに分けられる。古墳は前期古墳としては、紫金山古墳・將軍山古墳が相次いで築造される。両古墳とも全長約100m程の前方後円墳である。紫金山古墳の竪穴式石室からは、仿製三角縁神獸鏡9面を含む鏡12面・直文の刻まれた貝輪・碧玉製腕飾類・翡翠製勾玉・筒形銅器、鉄鏃・鉄刀・短甲などの武具、斧・鉈などの工具といった多種多様な副葬品が出土している。続いて前期末には、直径約10mの円墳である安

威0号墳、及び全長約45m程の前方後円墳である安威1号墳が築造される。

中期には、太田石山古墳・太田茶臼山古墳（継体天皇陵）が築造される。

後期になると、市内で最も早く横穴式石室を導入した青松塚古墳をはじめとして南塚古墳・海北塚古墳・耳原古墳、横穴式木室墳である上寺山古墳などが築造される。また山麓部を中心として横穴式石室を主体とする新屋古墳群・安威古墳群・將軍山古墳群などの群集墳が出現する。

後期末から終期末にかけては、初田古墳・阿武山古墳が築造される。最近では、平地部の駅前遺跡、郡遺跡、春日遺跡、段丘上の総持寺遺跡などで墳丘を削平された埋没古墳が多数検出されている。集落遺跡としては、東奈良遺跡・中条小学校遺跡・宿久庄遺跡・倍賀遺跡・郡遺跡・溝咋遺跡などがある。

奈良・平安時代 それまで三嶋郡と呼ばれてきた北摂地域は、律令の施行された頃より、嶋上郡・嶋下郡・豊嶋郡の三郡に分割された。茨木市は嶋下郡に位置しており、嶋下郡は、新野・宿人（久）・安威・穂積の四郷から成っていた。嶋下郡の郡衙は、地名と旧山陽道（西国街道）との位置関係より、郡遺跡周辺にあったと推定されている。近年の調査で奈良～平安時代にかけての掘立柱建物が出されている。この時期の掘立柱建物は、東奈良遺跡・宿久庄遺跡・総持寺遺跡・新庄遺跡などでも検出されている。特に新庄遺跡では、緑釉陶器・越州窯系青磁・小型滑石製の鎮具が検出されている。また、市内には太田廃寺・穂積廃寺・三宅廃寺などの寺院も造立されている。特に、太田廃寺からは、明治40年に舍利容器一具を納めた塔心礎・複子葉弁文軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦などが出土している。

中近世 茨木市内には、摂関家領およびその氏寺・氏神である興福寺領・春日社領が多く、福井庄・安威庄（安威）・沢良宜庄・新屋庄・溝杭庄・垂水東牧などがあつた。玉櫛遺跡の地においても文献によって（『台記別記』・『兵範記』）12世紀中葉には存在したことが分かるが、その後は史料には見えなくなる。摂関家領以外には、仁和寺領忍頂寺辺五ヶ庄・造酒司領太田保・長講堂領溝杭庄・総持寺領寺辺領・中宮式領宿久庄などがある。中世の遺跡としては、総持寺遺跡・宿久庄遺跡・東奈良遺跡などで掘立柱建物、井戸などが検出されている。また玉櫛遺跡の南東に位置する葦分神社東方遺跡では、近年の調査で地鎮遺構が検出されている。集落遺跡以外の遺跡としては、山間部にクルス山中世墓地・伏原中世墓地などが点在している。そして中世末から近世にかけては、茨木川左岸に茨木城が築城された。城主には、中川清秀、片桐且元がいる。この城は、周辺地域の芥川城・高槻城・池田城・伊丹（有岡）城などとともに北摂地域において拠点的な城であった。しかし、元和元年（1616）の一国一城令によって廃城となり、現在に至っているが、本格的な発掘調査は行われておらず、正確な縄張りも判明していない幻の城となっている。

参考文献

『茨木市史』 1969

『玉櫛遺跡発掘調査概要・I』 1993 大阪府教育委員会

『倍賀遺跡発掘調査概要報告書』1993 茨木市教育委員会

『葦分神社東方遺跡発掘調査概要報告書』1995 茨木市教育委員会



- | | | | | |
|-------------|---------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 玉櫛遺跡 | 16. 春日遺跡 | 31. 上寺山古墳 | 46. 安成遺跡 | 61. 太田茶白山古墳 |
| 2. 東奈良遺跡 | 17. 倍賀遺跡 | 32. 白頭瓦窯跡 | 47. 耳原古墳 | 62. 太田庵寺跡 |
| 3. 西方浄土寺跡 | 18. 中河原遺跡 | 33. 山田銅鏵出土地 | 48. 鼻摺古墳 | 63. 太田遺跡 |
| 4. 華分神社東方遺跡 | 19. 五日市遺跡 | 34. 新芦屋遺跡 | 49. 安成古墳群 | 64. 総持寺遺跡 |
| 5. 中条小学校遺跡 | 20. 耳原遺跡 | 35. 新芦屋古墳 | 50. クルス山中世墳墓 | 65. 今城塚古墳 |
| 6. 新庄遺跡 | 21. 穂積庵寺跡 | 36. 釈迦・池窯跡群 | 51. 佐保栗納山岩跡 | 66. 郡家川西遺跡 |
| 7. 牟礼遺跡 | 22. 郡山遺跡 | 37. 宿久庄西遺跡 | 52. 桑原古墳群 | 67. 芥川遺跡 |
| 8. 溝咋遺跡 | 23. 郡山古墳群 | 38. 宿久庄遺跡 | 53. 阿武山古墳 | 68. 郡家今城遺跡 |
| 9. 鮎川遺跡 | 24. 地藏池南遺跡 | 39. 紫金山古墳 | 54. 塚原古墳群 | 69. 宮田遺跡 |
| 10. 目垣遺跡 | 25. 茨木ゴルフ場内窯跡 | 40. 青松塚古墳 | 55. 墓谷古墳群 | 70. 津之江南遺跡 |
| 11. 上中条遺跡 | 26. 弁天山遺跡 | 41. 南塚古墳 | 56. 弁天山古墳群 | 71. 富田遺跡 |
| 12. 駅前遺跡 | 27. 上穂積神社西古墳 | 42. 海北塚古墳 | 57. 宮之川原遺跡 | 72. 芝生遺跡 |
| 13. 茨木城跡 | 28. 見付山古墳 | 43. 新屋古墳群 | 58. 大蔵可遺跡 | |
| 14. 茨木遺跡 | 29. 見付山遺跡 | 44. 西福井遺跡 | 59. 新池遺跡 | |
| 15. 郡遺跡 | 30. 松沢池北遺跡 | 45. 将軍山古墳群 | 60. 太田石山古墳 | |

第2図 周辺の遺跡分布図

第3節 調査方法

地区割については、財大阪府文化財調査研究センターでは、国土座標軸（第Ⅵ座標系）を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で区割ができるよう、大小6段階の区画を設定している。第Ⅰ区画は1/10,000地形図の地区割図をそのまま利用したもので、縦6km、横8kmを1区画とし、南西端を基点とし、縦軸はA～O、横軸は0～8で表示する。

第Ⅱ区画は、1/2,500地形図の地区割図をそのまま利用したもので、第Ⅰ区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割する。南西端を1とし、北東端を16とする東方向への平行式の地区名表示である。

第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。北東を基点に縦A～O、横1～20となる。

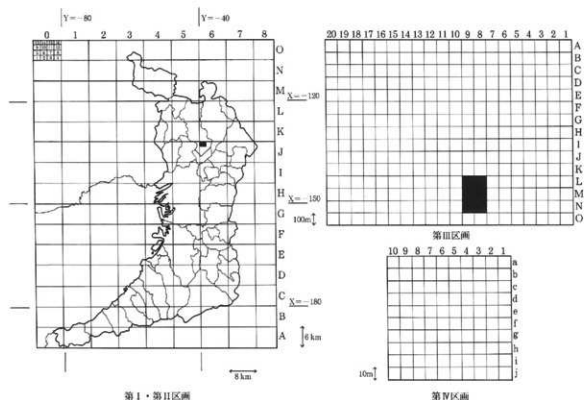
第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画内を10m単位に区画するもので縦、横各10に区分される。表示は北東端を基点に縦a～j、横1～10となる。

第Ⅴ区画は第Ⅳ区画内を5m単位で区画する。北東側Ⅰ、北西側Ⅱ、南東側Ⅲ、南西側Ⅳと表示する。遺物の取り上げに主に第Ⅴ区画を使用し、一部第Ⅳ区画を使用した。

第Ⅵ区画は第Ⅴ区画を任意に細分する際に使用するもので、北東端を基点に西へw+○m○ca○anといったように表示するが、玉櫛遺跡の発掘調査では使用しなかった。

玉櫛遺跡の調査範囲は第Ⅰ区画がJ9、第Ⅱ区画が13、第Ⅲ区画がM8、N8、M9、N9となる。方位は国土座標を使用することからも、座標北を使用する。

水準は東京湾平均海面（T.P.）を使用している。



第3図 地区割図

トレンチの名称は1995年度調査区をA地区とし、北西部を1A、南西部を2A、北東部を3A、南東部を4Aトレンチとした。また、1997年度調査区はB地区とし、北部集会所施設を1B区、南側防火水槽施設を2B区とした。(第1図参照)

調査面積は1995年度、1997年度あわせて約3200㎡にあたるが、現地表面より約2.7～3.2m下まで掘削するため周辺道路への影響を考慮して、府道八尾茨木線に近接する調査区の一辺、3A区と4A区の東辺、2B区の西辺にのみ鋼矢板を打設した。残りの3辺は勾配をつけて掘削した。

土層の堆積状況はこの四周の壁面と調査区中心に南北に設けたセクション、その他適宜セクションを設けて行った。遺構の平面実測はクレーンによる写真測量および平板実測で、20分の1、50分の1のスケールで行った。また、必要に応じて断面図や遺物出土状況図を作成した。

遺構番号については頭に遺構の性格を表す日本語名称を、次に遺構の性格、種類に関係なく検出順にアラビア数字を通し番号で与えたものをつないで遺構番号とする。つまり、井戸1、井戸2、井戸3…、土坑1、土坑2、土坑3…が存在するのではなく、井戸1、土坑2、溝3という様に全遺構番号の中で数字の部分はユニークである。

遺構番号については、全遺構数が4,000余りと膨大な上、調査が繁忙をきわめたため、多々重複する番号が存在することになってしまった。が、整理の際に全ての遺構番号をふり直すことはより混乱をきたすと考えたため、当初の遺構番号をなるべく尊重し、重複する番号には枝番を与えて区別することにした。本書遺構平面図には本文中で記述した遺構にのみ遺構番号を掲載している。

遺構面の名称については、各トレンチ毎に検出順に、上層から第1遺構面、第2遺構面といった名称を与えている。つまり新しい遺構面ほど遺構面の数字が小さい。本報告書での記述もこの発掘調査時の遺構面の名称に基づいて遺構面数の小さいもの順、つまり発掘調査順に各トレンチ毎に行う。各トレンチによって遺構面数が異なるので、各トレンチ毎の遺構面名称は対照していない。従ってトレンチ同志のつながりがわかりにくいのが、第5章のまとめで各トレンチの対応を整理したいと思う。

第4節 調査の経過

(1) 1995年度の調査

1995年度の調査は1995年4月1日から1996年3月31日まで実施した。

5月7日に周辺住民の方への事前説明会が大阪府建築部住宅建設課の主催で行われた。阪神淡路大震災の直後で、発掘調査工事の影響を懸念する声も挙がったが、事前の周辺調査等を入念にすることで了解いただいた。

第1節の調査にいたる経過でも前述したとおり、掘削土を場内に仮置する場所の確保や作業の安全性の確保の為、4つの調査区のうち東側2つの調査区(3A、4Aトレンチ)の調査を先行して着手することとした。

調査区壁面は府道八尾茨木線に面する一面、東面に関してのみ、矢板打設を行った。

7月14日3A区の機械掘削に着手。7月19日出来高測量、続いて4A区の機械掘削に着手、21日に完了。地表下約0.7mをバックホーで掘削した。上層は府営住宅の上下水管理設などにより大半は攪乱されており、盛り土や、最近の耕土層の部分を機械で掘削したことになるが、一部近世の耕土層と思われる遺構面も機械で掘削した。(よって、断面観察にとどめたにすぎないが、この遺構面を第1遺構面と呼ぶ。)

7月24日3A区の人力掘削開始。壁面調査、側溝掘削などをへて7月末には最初の遺構面の検出、掘削作業に入った。

8月8日、9日に3A区、4A区の最初の遺構面(第2遺構面)の足場からの写真撮影を行った。その後、8月30日、9月20日、10月4日の3回、航測会社に委託してレッカー車でのクレーン撮影、図化作業を行った。

9月、10月は両トレンチとも掘立柱建物の柱穴など遺構の集中する遺構面を検出し、作業は繁忙をきわめた。

クレーン撮影後も両トレンチとも、4～5面の遺構面の検出を行い、11月8日大阪府教育委員会文化財保護課の立会を受け、11月中旬には全ての調査作業が完了した。そして、11月下旬に埋め戻し作業を行って、3A、4A区の作業は終了した。

1A、2A区に関しても市道に面する西側の一边にのみ矢板を打設し、残りの三辺はオープンカット方式で掘削することとなった。

10月23日矢板打設開始、10月26日矢板打設終了。11月14日2A区の機械掘削開始、11月17日掘削終了。引き続き1A区の機械掘削を開始し、11月末には1A区の機械掘削も終了した。

機械掘削終了後、直ちに遺構面の精査、検出作業を行い、12月8日に地元住民を対象とした現地説明会を行い、約280名の参加を得た。1Aトレンチの墓域の説明や、壁面土層図を使つての説明が好評を得、玉櫛の地に関する理解を深めていただいた。その後も12月20日に玉櫛小学校4年生の社会科見学、12月25日には茨木市文化財愛護会の見学を得た。

1月18日、2月2日、2月23日の3回、両トレンチのクレーン撮影を行った。その後も両トレンチ共に2遺構面の検出作業を行い、3月20日に全ての作業を終了させた。

この間に、1A区で出土した桶棺墓などに関しては慎重に取り上げ作業を行い、中部調査事務所保存処理室へ保存処理を依頼した。また、1A・2A区の両方で見られた噴砂について、12月13日通産省工

業技術院地質調査所近畿中部地区センター寒川旭氏に鑑定いただき、噴砂に間違いなく、慶長の大地震の噴砂の可能性が高いとの指摘を受けた。

1A・2A区は3A・4A区に比べ地形的に遺構面の検出レベルが高いが、部分的に筋掘トレンチをいれて下層の堆積状況が3A・4A区と変わらないことを確認した。

3月21日に出来高測量を行い、以降埋戻し、鋼矢板引抜等を行い、全ての作業が完了した。

(2) 1997年度の調査

1997年度の調査は1997年5月1日から1998年3月31日の工事期間で実施した。(うち現場調査は1997年10月13日から1998年1月20日まで)

1995年度調査区と府道八尾茨木線を挟んで北東部にあたる一画に、集会所と防火水槽施設を作るための2つの調査区(1B、2Bトレンチ)を設けた。今回も、2つのトレンチの四周のうち、府道に近い2Bトレンチの西面のみ矢板打設を行い、残りはオープンカット方式で掘削を行った。

11月7日矢板打設開始。11月8日矢板打設終了。

11月10日より2B区の機械掘削開始。設計深度0.9mの深さまで掘削する。11月11日には1B区も機械掘削開始。11月12日2B区出来高測量。11月15日1B区出来高測量。

人力掘削も11月12日2B区より開始した。

11月20日2B区の第1遺構面の写真撮影を行った。その後、12月1日、12月4日、12月5日、12月10日、12月16日、12月22日の全7回の航測撮影を行った。

1B・2B区共7～8の遺構面を検出し、12月初旬～中旬にかけてが遺物を伴った掘立柱建物や溝群をを検出し、作業のピークであった。調査遺構についても1995年度調査区と同様、上層に近世の耕作面が存在し、以降平安時代末から室町時代の建物群、平安時代の水田、古墳時代以前の溝などを検出した。(ただし、遺構の検出地域は一部分に限られる。)

2B区に関しては、12月中に設計深度までの掘削を終え、埋戻し、1月8日に矢板引抜を終えて作業を完了させた。

1B区も空測終了後、最終遺構面の調査を行い、1月中旬には埋戻しに入り、全ての作業が完了した。

遺物整理作業を先行して行い、現場調査時は併行して洗浄、注記といった基礎作業を行った。1995年度調査に比べて、調査面積が7分の1、調査遺物はそれより更に少なかったため1995年度調査との対応に重点をおいて、現場終了後直ちに遺構面の整理、遺物実測、復元作業などを行い、1995年度実施分とあわせての報告書刊行の準備作業を行った。

第2章 1995年度の調査成果

第1節 基本層序

玉櫛遺跡は茨木川、淀川、安威川などの河川によって形成された沖積地である。よって、河川の氾濫により削平や擾乱を受けた土層が薄く多重に堆積し、トレンチ内でも自然の、あるいは人為的な、河川や溝が存在する。これらの遺構によって分断された土層は溝の両端、東西、南北で大きく異なり、従って、これらの層位の乱れた部分を除いて一つのトレンチ内でも同一層位を辿るのは大変困難をきわめた結果、同一遺構面として検出したが層位が異なるといった結果がたびたび生じた。

各トレンチ間の遺構面の対応についても充分検証しきれなかった部分があるが、比較的層位の擾乱を受けていない部分を選んで模式図で表し、基本層序の土層をローマ数字で表すこととした。また、最も基本層序に近いと思われる3A区南壁の断面図を別表に表した。

盛土 木造府営住宅建設時の盛土である。現地表面T.P.6.0m前後より50~60cm厚さである。砂質土中に大きな粘土ブロックを含む。

耕土層 府営住宅建設時の耕土であり、5Y3/2オリーブ黒色砂質土~粘土のかたくしまった土で溝や畝状の遺構が形成されていた。T.P.5.4m前後で層厚10~30cm、この層位の深さまで府営住宅に付随した下水道管の埋設工事などで大きな擾乱を受けていた。

I層 I層以下を平面調査の対象とした。灰オリーブ色砂質土で下層のII層と土性的にはよく似ており、判別がつきにくい。I層よりは幾分砂質が強く、酸化が進んで部分的に酸化マンガン粒を含み黄褐色を呈する。最も堆積の少ない4A区でT.P.4.9~5.2m、最も堆積の多い2A区でT.P.4.8~5.4mと検出高に差があり、約30~50cmの厚さで堆積し、西から東にいくほど低くなる地形をとる。畑など耕地として利用されている地域が多いが、建物柱穴も一部にみられる。

II層 黄褐色~オリーブ褐色の砂質土から粘質土で構成される。13世紀後半~14世紀代の土器を多量に含む。掘立柱建物が多数築成される遺構面となる。II層をさらに数cm単位に細かく分層することができ、土器を多量に包含するので、整地が行われたと考えられる。層厚20~40cmである。地震の液状化現象による噴砂がみられたのがこの層以下である。

III層 トレンチによってかなりの高低差が出る。最も高いところではT.P.4.8m、最も低いところでT.P.4.4mをはかる。層厚20~50cmと厚く、5GY4/1暗オリーブ灰色粘土をベース土とする。II層と同様、掘立柱建物など住居地の集中する遺構面であり、ベース土の間層として細かい層が多数観察でき、その各層に建物柱穴がみられることから、やはり、短いサイクルで建物を建て替えたり、整地が行われていたと考えられる。

IV層 IV層以下は畦畔などの水田遺構のみみられる土層となる。従って、粘性の強い5GY4/1暗緑灰色

粘土がベース土となる。Ⅳ層の上層に部分的だが、ところどころにラミナのみられる洪水堆積砂が残っているが全体には続かない。Ⅳ層以下は土地の平坦化が図られたのか調査区内の高低差が少なくなる。

Ⅴ層 水田耕土層を覆う洪水堆積層だが、各トレンチの広い範囲に堆積するためⅤ層とした。5Y5/4オリーブ色～7.5Y5/2灰オリーブ色シルトから粗砂が上層には粗砂や礫が、下層にはシルトが堆積し、全体の層厚は10～30cmと厚い。ラミナがみられる。相当規模の洪水がもたらした砂層で、Ⅳ層の水田耕土を覆ったと推定できる。

Ⅵ層 畦畔や人・動物の足跡の残る水田を形成する層である。T.P.3.7～3.9mで検出し、層厚20～40cmをはかる。Ⅳ層よりやや薄い色に見える10Y4/1灰色粘土をベース土とし、下層にいくほど粘性が強くなる。Ⅴ層の砂層を扶むため、Ⅳ層との識別が容易であった。

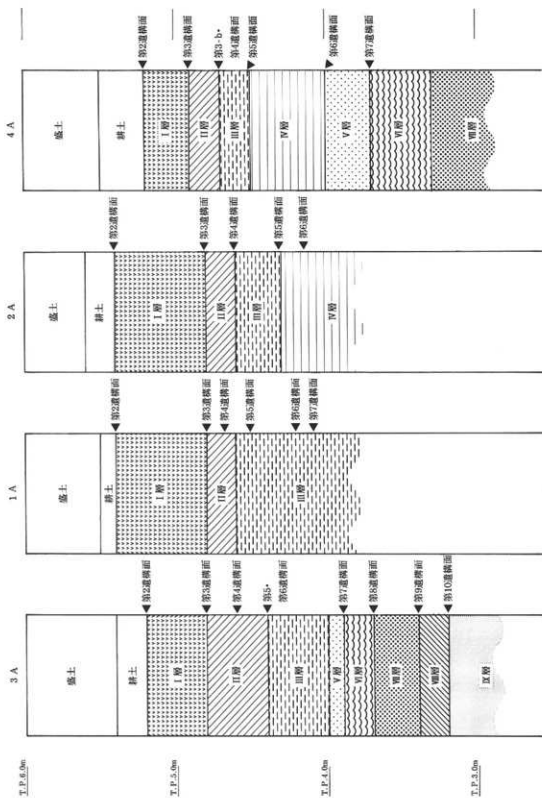
Ⅶ層 一見したところ紫色がかったみえる粘土層で、Ⅵ層との境界は明確でない。T.P.3.7～3.3mで検出され、2.5Y3/2黒褐色砂混粘土をベース土とする。人為的な遺構はみられなかったが、縄文～奈良時代の遺物を含む。有機物、葦状の植物遺体を多く含み水分含有が多いことから低湿地状だったと推定される。Ⅶ層とⅧ層の間に礫層がみられる箇所もある。

Ⅷ層 Ⅷ層以下は掘削の都合上3A区と1B・2B区のみでしか観察されなかった。10YR4/2灰黄褐色粘土をベース土とする。T.P.3.4m前後で検出した。Ⅶ層とⅨ層との相互関係から奈良時代から弥生時代の層と考える。

自然河川と考えられる段差を検出したが、人為的な遺構は見られない。

Ⅸ層 T.P.3.2mで検出。Ⅸ層上面より弥生時代から古墳時代にまたがる溝や土坑などを検出した。この層以下では遺構を検出せず、事実上の地山面と考える。10Y4/1灰色砂質土で砂礫層となる部分もある。植物遺体を多く含む。

地形的には水田遺構面では意図的に地形の平坦化がはかられたようであるが、それ以外の自然地形は調査区の西から東にかけて低くなる傾向がある。これは、調査区の西側に元茨木川が位置することに起因する。洪水等による氾濫を受けて土砂が多く堆積した結果、西側が高い地形が形成されたといえるだろう。



第4圖 基本層序模式圖

TP.6.0 E

TP.5.0

TP.4.0

TP.3.0

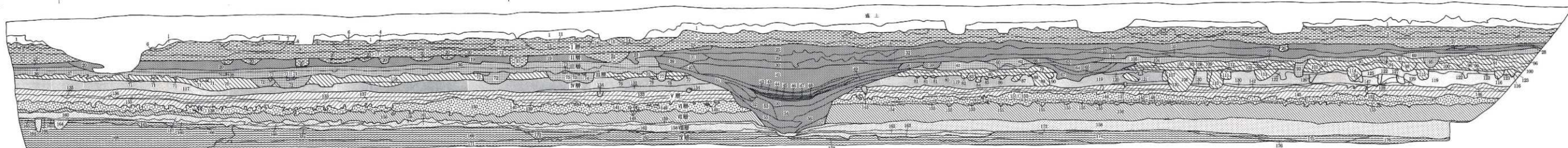
Y=38,790

Y=38,800

Y=38,810

Y=38,820

W



- | | | | | | |
|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|-----------------------------|---------------------------------|----------------------------------|
| 1. N 3.0 暗灰色 砂質土 | 31. 2.5Y 5.0 黄褐色 砂質土 | 61. 7.5Y 6.0 灰オリーブ色 砂質土 | 91. 5Y 4.0 暗オリーブ色 砂質土 | 121. 5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 151. 5Y 3.0 オリーブ黒色 粘土 |
| 2. 2.5Y 5.0 黄褐色 粘砂 | 32. 8.5Y 6.0 オリーブ灰色 粘質土 (礫混り) | 62. 2.5Y 5.0 黄褐色 粘質土 | 92. 2.5Y 4.0 オリーブ黒色 粘質土 | 122. 2.5Y 3.0 黒褐色 砂質土 | 152. 7.5Y 4.0 オリーブ黒色 粘質土 |
| 3. 5Y 5.0 オリーブ色 砂質土 | 33. 2.5Y 5.0 黄褐色 粘質土 (礫混り) | 63. 5Y 4.0 オリーブ色 粘土 | 93. 5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 (炭酸鈣) | 123. 2.5Y 6.0 灰色 砂質土 | 153. 7.5Y 4.0 暗褐色 粘土 |
| 4. 7.5Y 7.0 黄褐色 粘砂 | 34. 2.5Y 4.0 黄褐色 粘質土 (礫混り) | 64. 2.5Y 4.0 オリーブ黒色 粘質土 | 94. 2.5Y 3.0 暗褐色 粘質土 (粘土混り) | 124. 2.5Y 3.0 黒褐色 粘質土 (粘土混り) | 154. 7.5Y 4.0 暗褐色 粘質土 (シルト混り) |
| 5. 5Y 7.0 黄褐色 粘砂 | 35. 2.5Y 3.0 暗オリーブ黒色 粘質土 | 65. 5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 95. 2.5Y 4.0 オリーブ黒色 粘質土 | 125. 10Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 155. 10Y 4.0 灰色 粘質土 |
| 6. 7.5Y 5.0 オリーブ黄色 砂質土 | 36. 2.5Y 4.0 暗褐色 粘質土 (粘土混り) | 66. 2.5Y 3.0 暗オリーブ黒色 粘質土 | 96. 7.5Y 4.0 灰色 砂質土 | 126. 2.5Y 4.0 オリーブ黒色 粘質土 | 156. 5Y 2.0 オリーブ黒色 粘土 |
| 7. 10Y 6.0 灰色 粘質土 | 37. 7.5Y 4.0 暗オリーブ色 粘質土 (粘土混り) | 67. 2.5Y 3.0 暗褐色 粘質土 | 97. 2.5Y 3.0 暗褐色 粘質土 | 127. 2.5Y 3.0 暗褐色 粘質土 | 157. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘土 |
| 8. 7.5Y 6.0 灰色 粘土 (シルト) | 38. 10Y 4.0 灰色 粘質土 | 68. 5Y 4.0 暗オリーブ色 粘質土 | 98. 5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 128. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 158. 10Y 3.0 暗褐色 粘土 |
| 9. 7.5Y 6.0 灰オリーブ色 砂質土 | 39. 10Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 (礫混り) | 69. 7.5Y 3.0 黄褐色 粘質土 | 99. 10Y 3.0 灰色 粘質土 | 129. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 (粗砂混り) | 159. 2.5Y 4.0 黄褐色 粘質土 |
| 10. 7.5Y 5.0 オリーブ色 粘質土 | 40. 7.5Y 4.0 暗オリーブ色 粘質土 (小石混り) | 70. 2.5Y 3.0 暗オリーブ黒色 粘土 (炭酸鈣) | 100. 5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 130. 2.5Y 5.0 黄褐色 粘質土 | 160. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 |
| 11. 10Y 5.0 灰オリーブ色 砂質土 | 41. 5.0Y 5.0 青灰色 粘質土 | 71. 7.5Y 7.0 黄褐色 シルト | 101. 5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 131. 10Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 (粗砂混り) | 161. 10Y 3.0 暗褐色 粘質土 (礫混り、シルト混り) |
| 12. 7.5Y 5.0 灰オリーブ色 砂質土 | 42. 5Y 3.0 オリーブ黒色 粘土 | 72. N 5.0 灰色 粘質土 | 102. 2.5Y 4.0 オリーブ黒色 粘質土 | 132. 7.5Y 3.0 暗褐色 粘質土 | 162. 10Y 3.0 暗褐色 粘質土 |
| 13. 10Y 5.0 灰オリーブ色 砂質土 | 43. 2.5Y 5.0 オリーブ黒色 粘土 | 73. 7.5Y 5.0 黄褐色 粘土 (粗砂混り) | 103. 5Y 4.0 暗オリーブ色 粘質土 | 133. 2.5Y 4.0 暗オリーブ黒色 粘質土 | 163. 7.5Y 3.0 灰色 粘質土 |
| 14. 5Y 5.0 灰オリーブ色 砂質土 | 44. 7.5Y 3.0 暗褐色 粘土 | 74. 2.5Y 5.0 黄褐色 粘土 (礫混り) | 104. 10Y 2.0 灰色 粘質土 | 134. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 164. 10Y 3.0 オリーブ黒色 シルト |
| 15. 5Y 5.0 灰オリーブ色 砂質土 | 45. 10Y 3.0 暗オリーブ色 粘土 | 75. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘土 (炭酸鈣) | 105. 2.5Y 3.0 暗褐色 粘質土 | 135. 7.5Y 3.0 暗褐色 粘質土 | 165. 10Y 4.0 オリーブ灰色 シルト |
| 16. 7.5Y 5.0 灰オリーブ色 砂質土 | 46. 2.5Y 4.0 暗オリーブ色 粘土 | 76. 10Y 3.0 オリーブ黒色 粘土 (炭酸鈣) | 106. 2.5Y 3.0 暗褐色 粘質土 | 136. 10Y 4.0 オリーブ灰色 砂質土 | 166. 2.5Y 4.0 暗オリーブ灰色 粘質土 |
| 17. 5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 47. 2.5Y 3.0 暗オリーブ灰色 粘土 | 77. 7.5Y 2.0 オリーブ黒色 粘土 (炭酸鈣) | 107. 2.5Y 4.0 暗褐色 粘質土 | 137. 5.0Y 3.0 オリーブ灰色 シルト | 167. 10Y 4.0 灰色 粘質土 |
| 18. 10Y 5.0 灰色 粘質土 | 48. 2.5Y 2.0 暗褐色 粘質土 | 78. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘土 (炭酸鈣) | 108. 10Y 3.0 灰色 粘質土 | 138. 10Y 3.0 暗褐色 粘質土 | 168. 5Y 4.0 オリーブ灰色 粘土 |
| 19. 10Y 4.0 灰黄褐色 粘質土 (多量の礫を含む) | 49. 7.5Y 6.0 オリーブ灰色 粘砂 (礫混り) | 79. 5.0Y 5.0 黄褐色 シルト | 109. 10Y 2.0 灰色 粘質土 | 139. 5Y 4.0 暗オリーブ色 砂質土 | 169. 10Y 4.0 灰色 粘質土 |
| 20. 2.5Y 4.0 暗褐色 粘質土 (礫混り) | 50. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 (礫混り) | 80. 10Y 5.0 黄褐色 シルト | 110. 5Y 2.0 オリーブ灰色 粘土 | 140. 10Y 4.0 オリーブ灰色 粘質土 | 170. 2.5Y 2.0 暗褐色 シルト |
| 21. 7.5Y 4.0 暗褐色 (小石混り) | 51. 5Y 4.0 暗オリーブ色 粘質土 (礫混り) | 81. 5Y 6.0 オリーブ黒色 粘砂 | 111. 5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 141. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘土 | 171. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘土 |
| 22. 10Y 4.0 灰色 粘質土 | 52. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 (礫混り) | 82. 5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 112. 5Y 2.0 灰色 粘質土 | 142. 10Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 172. 10Y 3.0 暗褐色 粘質土 |
| 23. 2.5Y 3.0 暗褐色 粘質土 | 53. 7.5Y 2.0 オリーブ黒色 粘質土 (礫混り) | 83. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 113. 2.5Y 3.0 暗褐色 粘質土 | 143. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 173. 7.5Y 4.0 灰オリーブ色 粘質土 |
| 24. 2.5Y 4.0 暗褐色 粘質土 | 54. 10Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 84. 5Y 4.0 暗オリーブ色 粘質土 | 114. 2.5Y 3.0 暗褐色 粘質土 | 144. 10Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 174. 5Y 4.0 暗オリーブ色 粘質土 |
| 25. 10Y 6.0 灰色 粘質土 | 55. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 85. 5Y 5.0 オリーブ黒色 粘質土 | 115. 7.5Y 4.0 灰色 粘質土 | 145. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 175. 10Y 3.0 暗褐色 粘質土 |
| 26. 10Y 3.0 暗褐色 粘質土 | 56. 7.5Y 2.0 オリーブ黒色 粘質土 (粘土混り) | 86. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 (粘土混り) | 116. 5Y 4.0 灰色 粘質土 | 146. 10Y 5.0 灰色 粘質土 | 176. 10Y 5.0 暗褐色 粘質土 |
| 27. 7.5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 57. 10Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 87. 2.5Y 4.0 オリーブ黒色 粘土 | 117. 10Y 3.0 オリーブ黒色 粘土 | 147. 2.5Y 3.0 暗褐色 粘質土 | |
| 28. 5Y 5.0 黄褐色 粘質土 | 58. N 4.0 灰色 粘質土 | 88. 5Y 4.0 灰色 粘質土 | 118. N 5.0 灰色 粘質土 | 148. 10Y 4.0 オリーブ灰色 粘質土 | |
| 29. 5Y 7.0 黄褐色 粘砂 | 59. 5Y 6.0 オリーブ黒色 粘砂 | 89. 7.5Y 6.0 オリーブ黒色 粘質土 | 119. 10Y 6.0 灰色 粘質土 (粗砂混り) | 149. 10Y 4.0 オリーブ灰色 粘質土 | |
| 30. 3.0 青灰色 粘質土 | 60. 2.5Y 4.0 オリーブ黒色 粘質土 | 90. 10Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 120. 5Y 3.0 オリーブ黒色 粘質土 | 150. 10Y 4.0 オリーブ灰色 粘質土 | |



第5図 3A区南壁断面図

第2節 遺構

遺構の記述は1A・2A・3A・4Aの各調査区毎に、発掘調査を行った時の調査順序に従って記述することとした。従って、数字の小さな遺構面ほど上層の遺構面、つまり時期的に新しい遺構となる。ただし、発掘調査時は2つの遺構面として調査したものの、1つの遺構面と認識するのが妥当と判断したものは、1つにまとめた。各調査区の遺構面の対応は第5章にまとめた。また、1995年度と1997年度の調査区の対応は1997年度の項で記述した。

(1) 1A区の遺構

1) 第2遺構面の遺構

1A区は隣接する3A区との層位の対応から5GY4/1暗オリーブ灰色砂質土をベース土とする面を第2遺構面と定めて、調査を開始した。しかし、第2遺構面では遺構は検出されずT.P.5.3～5.4mでほぼ水平に広がる面を検出したにとどまった。

2) 第3遺構面の遺構

第3遺構面は7.5Y4/2灰オリーブ色粘土をベースとし、T.P.5.0mの高さでほぼ平坦に広がる地形である。調査区中央部の溝2064、西端の溝2065の2本の南北に走る大きな溝とそれに平行して走る幾本かの溝、溝2064を挟んで調査区の全域、特に南東部に集中してみられる、柱穴、土坑群で構成される。

特筆すべきはこの調査区中央の大溝2064で、やや大きさは異なるもの下層の第4遺構面、第5遺構面でもほぼ同位置に、南北方向の人為的な大溝を検出した。また、溝2064及びその周辺から卒塔婆や火葬墓など墓域の存在を裏づける遺構・遺物を検出した。

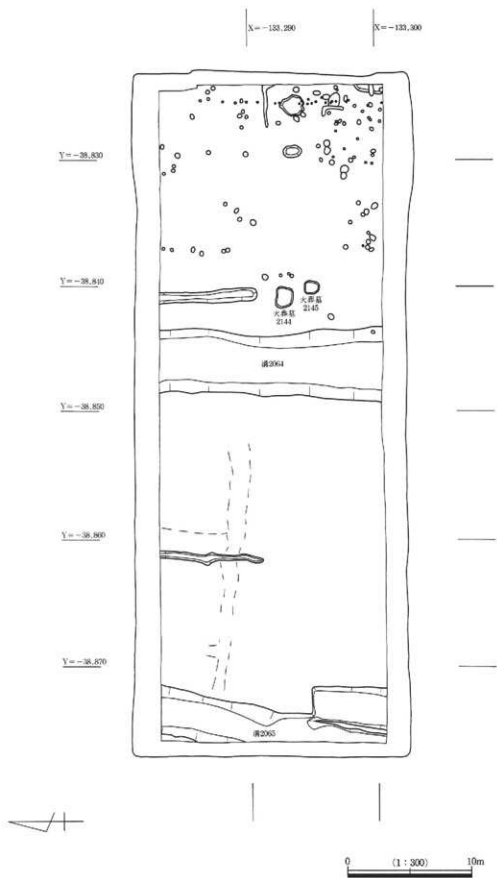
溝2064

溝2064はY=-38,844～Y=-38,847の約3～4m幅、深さ70cmをはかる大きな溝である。断面形は緩やかな逆台形をなし、灰オリーブ色のシルトから微砂とオリーブ黒色粘土が堆積する。上層にはラミナが見られたり、足跡の踏み込みが残っていたりと、自然に堆積した状況がうかがえるが、後述の溝2410、河川2937とほぼ同じ場所に位置することや、溝の形状からは人為的な溝と思われるので溝2410や河川2937が長期間にわたって少しずつ自然堆積し浅くなった状態を、この遺構面で検出したと考えるのが妥当だろう。

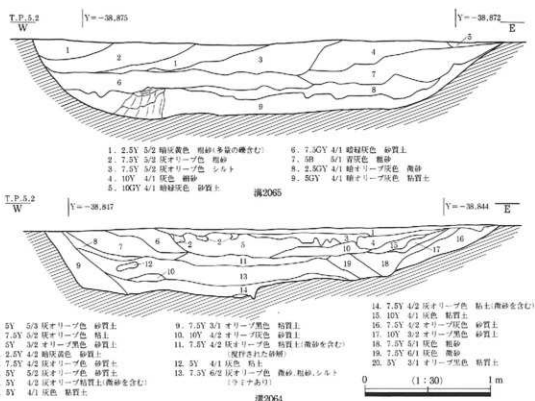
溝2065

幅4m、深さ約70cm程度をはかり、調査区の西端を流れる大溝である。埋土はシルトから粗砂で、下層のみ粘土が堆積する。溝2064と同じく南北に走ることや、規模・形状も溝2064と似ることから溝2064と対をなす、あるいはつながる溝と思われるが、検出した範囲では、不明である。第5遺構面でも同位置に溝2945が存在する。

溝2064、溝2065とも遺物が少なく、詳細な時期は不明である。また、溝2064と2064に挟まれた地域は、



第6图 1A区第3遺構面平面图



第7図 1A区第3遺構面溝2064・溝2065断面図

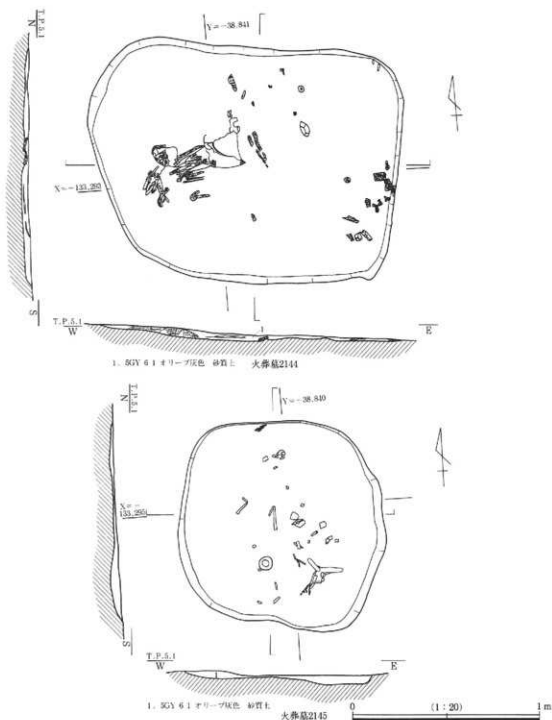
土坑や溝を検出しているものの、明確な柱穴は検出できず、土層からも集落地よりは耕地であった可能性が高い。従って、この2つの溝の性格として屋敷地を区画する溝とは考え難い。第3遺構面より以前の遺構面で屋敷地の区画溝として機能していた溝が時間を経て埋積し、屋敷地の区画溝としての意味を失ったものとする。集落はむしろ、溝2064より東側の部分に形成されるようである。

むしろ溝2064の肩部に火葬墓が検出されることから、溝2064が集落とその外側墓域や耕地などの区域を区画する意味あいをもっていたと考えられる。

火葬墓2144・火葬墓2145

火葬墓2144は長辺1.7m、短辺1.3mの長方形の土坑、火葬墓2145は1辺1m強のほぼ正方形の土坑で、いずれも深さは5cm～7cmと浅い。後世の削平を受けている。全面に炭化した木や骨が広がり、骨は性別・部位の判別などは不能であった。

炭化物を除去すると火葬墓2144からは土師皿1枚、宋銭(祥符元宝)1枚が、火葬墓2145からも土師皿1枚、刀子と思われる金属の一部が出土した。出土遺物は金属は火を受けているが、土師皿は炭化していなかった。また掘方の土も焼土ではない。よって、遺体が別の場所で焼かれた後に、この遺構に埋葬され、その際副葬品として土師皿等が納められたと考える。副葬品の埋納位置は、火葬墓2144は北東部、火葬墓2145は南西部と不定である。土師皿はヘソ皿と呼ばれる底部が盛り上がった小皿で、14世紀代のものと思われる。また、炭化物を除去した後、火葬墓2144・火葬墓2145ともに柱穴のような直径5～10cmの穴が多数認められた。この墓を築造した際に周囲を囲っていた柵などの施設とも考えられたが、穴の配置には規則性はなく、中心部にも穴がみられるので、この柱穴と火葬墓の関係は不明である。



第8図 1A区第3遺構面火葬墓2144・火葬墓2145平面・断面図

1A区第3遺構面は包含層中より和泉Ⅲ型式終末段階の瓦器碗や青磁碗、瀬戸系陶器が出土していることより14世紀代～15世紀の年代を与える。ただし、溝2064、溝2065はこれより新しくなる可能性をもつ。また、この1A区の第3遺構面と2A区の第2遺構面で、地震の際の液化現象により下層の砂が噴出して地表面に表れる、いわゆる噴砂の痕跡を検出した。(第9図)この噴砂について寒川旭氏に鑑定いただいたところ、慶長の大地震の影響の噴砂ではないか、との教示を得た。噴砂はこの遺構面から確認されたので、遺構面の廃絶時期は16世紀後半まで上がる可能性がある。



第9図 1A区および2A区地震痕跡

3) 第4遺構面の遺構

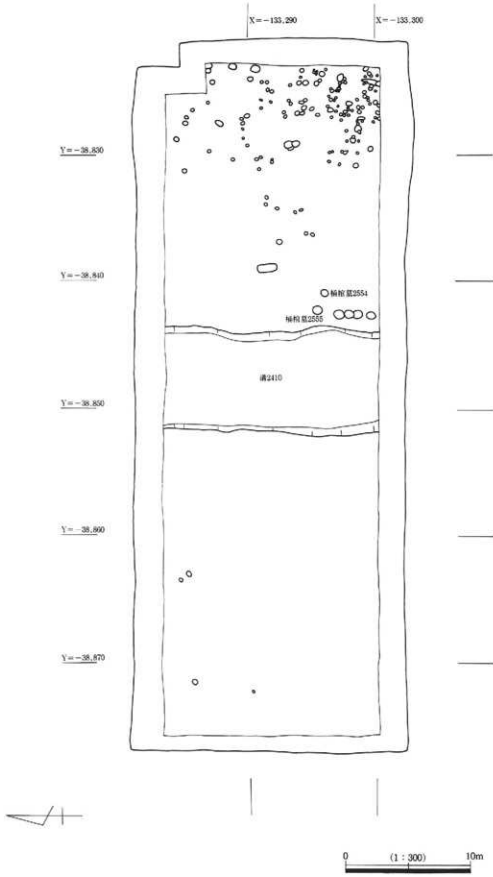
第4遺構面はT.P.4.8~4.9mを標準標高とし、西側に向かってやや下がるもののほぼ平坦な地形をなす。調査区東半部では、黄褐色砂質土をベース土とするが、細かく細分でき、土中には土器の破片を多く含む。整地を行っていたと考えられる。西半部では、暗オリーブ灰色の粘土層が広がる。

第4遺構面では調査区の中央に南北の大溝2410を検出した。この溝は第3遺構面の溝2064とほぼ同じ場所に位置する。溝2410より西側には遺構はみられず、溝2410より東側に多数の柱穴を検出した。柱穴には柱木や敷石を伴うものも多数あり、掘立柱建物は、1A区の東端から3A区にかけて、東西に棟方向をもつ建物2棟を復元した。

また、溝2410の東岸、柱穴の集中する地域よりややはずれたところから、桶棺墓2554・桶棺墓2555の2基の桶棺墓や、土坑墓の可能性もある土坑2646~2649、瓦や石敷など墓に伴う遺構と考えられる石列2556などを検出した。この辺り一帯に墓域が形成されていたと考えられる。

また、柱穴の集中する部分より、3A区第3遺構面で検出した土器溜54の続きを検出した。1A区第4遺構面と3A区第3遺構面は対応する遺構面と考えられる。

第4遺構面の年代は包含層、遺構共にⅢ型式終末段階の瓦器椀が出土していることや、土器溜54の出



第10図 1A区第4遺構面平面図

土遺物より13世紀末～14世紀前半の年代と考える。

掘立柱建物 1

梁間2間、棟行3間をはかる総柱建物として復元したが、柱間の間隔や柱穴の規模にばらつきがあり、柱が揃わない部分もあるので、建物にならない可能性もある。2、3回の建て替えが行われたようである。

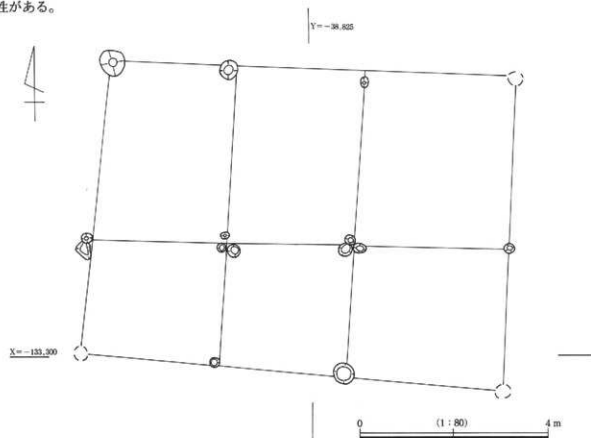
掘立柱建物 2

2間×3間の建物として想定したが、北側の梁1間分は完全な形で検出できていないので、建物の構造が変わる可能性がある。

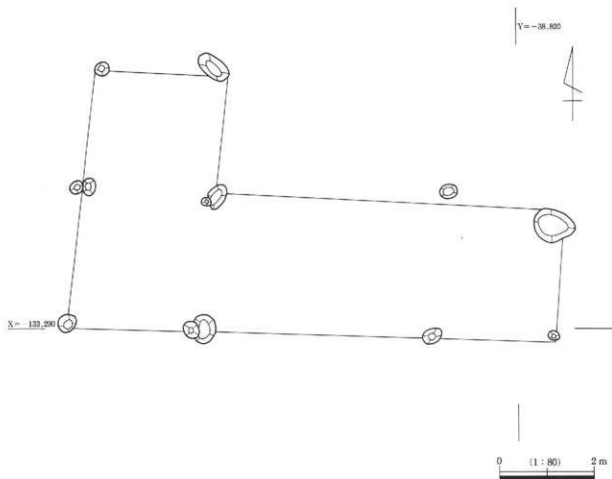
溝2410

Y=-38,844～Y=-38,852の幅7.7mもある南北方向の大溝である。浅く緩やかに広がる部分と、狭く深い部分があり、深い部分では深さ1mを超える。埋土も有機物を含む粘質土で人為的な溝であることは間違いない。

底部近くより五輪塔水輪部及び卒塔婆が出土した。卒塔婆は下方がわずかに欠損するが原形をとどめる。表面に墨書で「南無(無)阿弥陀佛右趣者為性 三七日追善」と記されている。溝2410の東岸では、後述のような墓が数基検出されており、これらの墓の卒塔婆や五輪塔として立てられたものが、流れ込んだと考えられる。すると、溝2410は墓群より新しい時期となり、15世紀以降も存続していた可能性がある。



第11図 掘立柱建物 1



第12図 掘立柱建物 2

桶棺墓2554

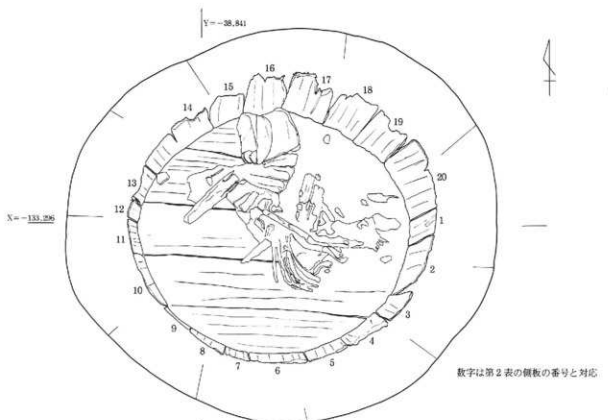
円形の掘方におさめられていた。

直径約35cm、高さ30cm弱の桶棺が蓋をした状態で検出された。桶の側板は20枚の幅3～7cmの板をねじり竹でできた箍で結わえたもので、蓋板、底板は1枚の板ではなく、何枚かの板を木釘でつなぎ止めて円形としたものである。土圧のためか、蓋板はかなりめり込み、側板も上部は欠損した状態であった。本来はもっと高く、桶棺の上に土盛をしていたものが、削平されたと考えられるが、桶としては小型のものである。

蓋板をはずすと、人骨の一部と北の方向に漆器椀、銅銭数枚が埋納してあった。埋納品は元位置を止めているかは定かでないが、漆器椀は横置きされ、その中に銅銭が入っていた。

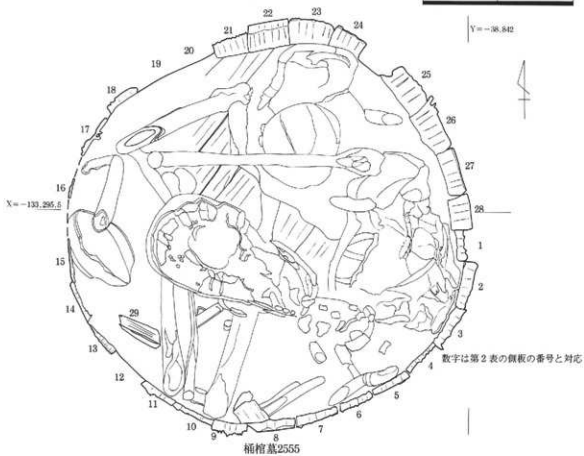
桶棺墓2555や後述の箱棺墓などと共に土をポリウレタン樹脂で固めた状態で取り上げ、財大府文化財調査研究センター中部調査事務所保存処理室に運び、解体、保存処理を依頼した。

その結果、箱棺の周囲に竹を38本刺してあったことが判明した。また、埋葬主体は3歳以下の乳幼児であるが、骨の残存状況が悪く、性別等は不明である。埋葬者に合わせて小型の桶棺を用意したと思われる。埋納品の漆器椀は内外面とも黒塗装であるが、法量等は不明である。銅銭は6枚で、開元通宝が1枚、聖宋元宝1枚、嘉祐通宝1枚、天禧通宝1枚、元豊通宝1枚、紹聖元宝1枚の宋銭が重ねられていた。桶棺墓の周囲に竹を刺したり、竹籠状のもので覆って動物による損壊から守ったり、死霊から守る風習があることが指摘されている¹⁾。



桶棺墓2554

0 (1:5) 20cm



第13図 1A区第4遺構面桶棺墓2554・桶棺墓2555平面図

第2表 桶棺墓2554・2555 側板・竹測定表 (側板の番号は第11図と対応)

桶 棺 墓 2554			桶 棺 墓 2555					
竹			側 板					
番号	長さ (cm)	長径 (cm)	番号	長さ (cm)	幅 (cm)	番号	長さ (cm)	幅 (cm)
1	21.0	0.9	1	24.4	3.2	1	27.0	5.0
2	35.8	1.4	2	27.5	6.5	2	43.0	5.8
3	30.0	0.7	3	21.5	3.8	3	35.5	5.3
4	34.5	0.7	4	25.7	5.4	4	36.4	5.0
5	30.0	1.4	5	23.0	5.7	5	34.5	6.0
6	26.0	1.1	6	24.6	6.8	6	34.8	3.8
7	30.5	0.9	7	20.4	3.3	7	35.0	5.5
8	27.6	1.0	8	21.5	6.0	8	33.6	6.0
9	26.5	0.9	9	22.3	3.3	9	36.5	5.7
10	27.5	1.6	10	22.5	7.7	10	29.4	5.3
11	25.3	1.3	11	24.5	5.9	11	38.1	5.8
12	29.5	1.3	12	21.0	4.4	12	25.9	5.0
13	24.2	1.2	13	23.2	4.3	13	34.3	5.6
14	32.4	1.1	14	29.0	7.0	14	37.8	5.6
15	29.7	0.9	15	22.5	3.5	15	30.7	5.6
16	14.0	1.2	16	30.3	5.5	16	21.2	5.4
17	9.8	0.7	17	29.0	6.0	17	30.8	5.4
18	22.3	0.9	18	26.8	4.5	18	32.6	5.9
19	22.2	1.0	19	28.5	4.5	19	35.0	4.5
20	19.4	1.4	20	28.0	7.5	20	9.7	5.3
21	21.0	1.0				21	12.6	3.3
22	24.2	1.1				22	22.7	5.3
23	25.8	0.9				23	35.2	5.7
24	22.9	1.2				24	35.9	5.6
25	20.0	1.1				25	13.8	5.6
26	28.0	1.3				26	40.3	5.6
27	26.0	1.4				27	38.2	5.7
28	29.0	1.1				28	35.7	3.7
29	22.0	1.1				29	38.4	5.8
30	27.6	1.0				30	36.5	5.5
31	26.5	0.8						
32	31.5	0.9						
33	33.0	1.0						
34	29.5	0.9						
35	31.0	1.0						
36	9.0	0.8						
37	?	?						
38	?	?						

桶棺墓2555

桶棺墓2554の北西1mほどの近接した場所で桶棺墓2555を検出した。掘形は直径70cmの円形でその中に直径約66cm、高さ40cm強の桶棺がおさめられていた。やはり上方は欠損しており、底板の径から判断しても、また、坐棺葬であることから1m程度の高さはあったと思われる。桶は28枚の側板で構成され、蓋板は失われていた。

桶棺墓2555の方は人骨の残存状況が良く、頭蓋骨、大腿骨などが判別でき、頭蓋骨は底に顔を向けた状態で、大腿骨や脛骨が繋がった状態で検出され、坐棺の状態で埋葬されたことが明瞭である。北側、頭上に漆器碗が中心に向かって内面を向けた状態で、また、その口縁部周辺に銅銭が埋納されていた。

解体の結果、やはり桶棺の周囲には4本の竹が刺さっていた。実際はもっと多かったのかも知れない。底板は9枚の板を木釘でつないで円形にしたもので、側板には、箍の痕跡が残る。

人骨は土圧で変形を受け、劣化が著しかった。骨盤部で部位を判断できる骨がないため性別は不明、

また、頭骨の状態より18歳前後の骨であるとの鑑定を大阪市立大学安部みき子氏より受けた。(第4章参照)

埋納品中、漆器碗は劣化が激しく、皮膜のみが残っているような状態だが、内面赤漆、外面黒漆塗で、内面口縁部のみ黒く緑取りしており、底部には赤漆で「.」という印が施文されてあった。銅銭は5枚でいずれも宋銭、祥符元宝2枚、皇宋通宝1枚、景徳元宝2枚である。六文銭の風習に基づいたものと言える。

石列2556

溝2410の東肩に沿って初め4つの円形の土坑を検出したが、形が不明瞭なため更に掘り下げると、列状に並ぶ石や瓦片を敷き並べた遺構を検出した。南北およそ3mの長さに及ぶ。石は小石大のものから30~40cm大のものなど様々であり、瓦は平瓦などである。完全な形になるものは殆どない。中近世の墓域において同様の石敷遺構の検出例があり、墓域の一部と判断した。

4) 第5遺構面の遺構

第5遺構面は標準標高T.P.4.4~4.7mをはかり、溝2955より西側が、全体的に低くなる地形をとる。第3遺構面と同じ位置、調査区中央と西端に河川2937、溝2945を検出した。

やはり河川2937より東側に掘立柱建物の柱穴が集中してみられ、川の東岸には箱棺墓2基や墓の形跡らしいものが検出された。

河川2937

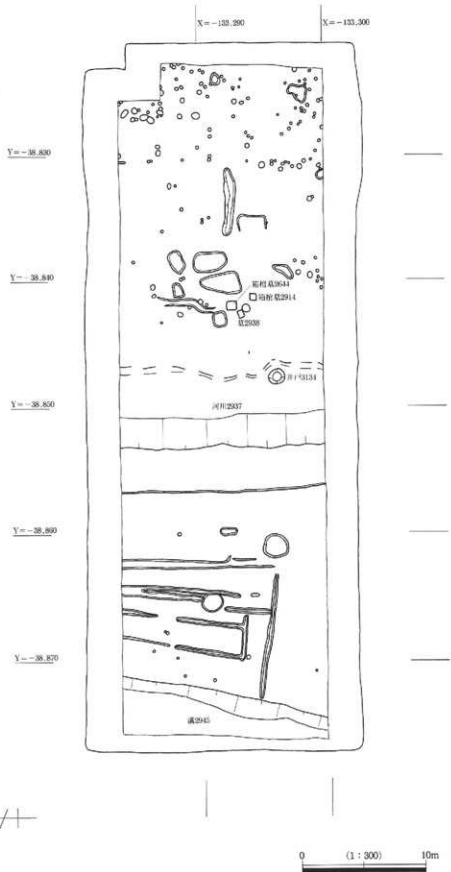
Y=-38,847からY=-38,853の幅6m以上、深さ2mにも及ぶ大きな溝である。断面形状を見ると最深部は幅0.5m、深さ1m程度の逆台形の溝でその上部に幅2~3m、深さ1m程度の溝が形成され、さらにその上で急速に広がる3段階の階段状の溝であることが分かる。断面形状からは人為的な溝の感が強いが、埋土を見る限り、底より0.5m位までは埋め戻しのブロックなどを含むが、それより上層では自然に埋没したような堆積状況を示し、長期間存続した遺構と考えられる。遺構の性格上は溝であるが、発掘調査時の考えに従って河川という名称のままとした。この底より1m程の深さの逆台形の溝は古い時期の遺構で、それが埋没した後に河川2937が形成されたのではないかと考える。出土遺物に一部古い型式の瓦器を含むことからこの考えは妥当と思われる。

出土遺物として卒塔婆・漆器などの木製品や土器がある。卒塔婆は溝2410出土のものと同様に異なり上方一部分のみの出土である。漆器は黒漆地に赤漆で文様が手描された碗や皿が出土している。土器には天目茶碗や瀬戸灰釉入子、三島手の陶器鉢、瓦質風炉などの優品を含み、瓦器皿など古い時期のものを含むが、多くの瓦器碗や土師皿は14世紀中葉の年代を示す。従って、14世紀中~後半の遺構と考える。

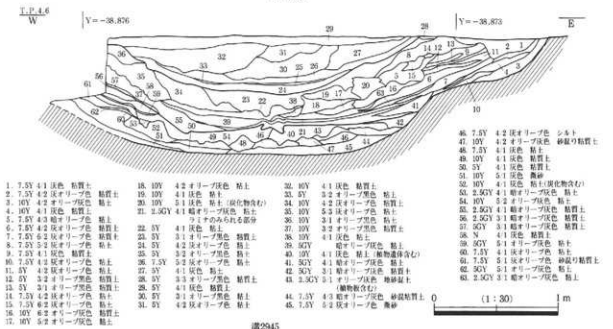
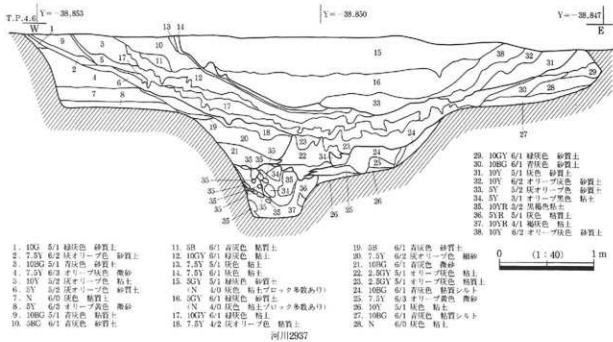
出土遺物と位置から判断して、2A区の河川2597に続く可能性がある。

溝2945

幅3.5m、深さ1mの大きさの溝である。規模・断面形状は河川2937と似るが、連続する遺構であるかの断定はできなかった。出土遺物が少なく、時期は不明である。第3遺構面で検出した溝2065と同じ場所に位置することからも、本来は同じ遺構であったと考えられる。



第14图 1A区第5号遗构面平面图



第15図 1A区第5遺構面河川2937・満2945断面図

箱棺墓2914

箱棺墓2914、箱棺墓2644、墓2938は、第3遺構面・第4遺構面で検出した火葬墓や桶棺墓のすぐ北、河川2937の東岸で検出された。長辺38cm、短辺27cm、高さ8cmの長方形の箱棺である。底板はほぼ残存するが、蓋板、側板は部分的にしか残存しない。人骨も全く残っていなかったが、箱の中心よりやや西に内外面共黒漆塗の漆器椀が正置されていた。また、炭化した玉6つも出土した。材質不明だが、数珠の一部と考えられる。漆器椀は口径10.2cm、器高4.2cmの小ぶりのもので、外面底部に赤漆で「聖」の字が書かれる。内外面赤漆で、高台が高くなるなど15世紀以降の漆器の特徴をもつのでこの遺構は15世紀代のものと考えられる。

箱棺墓2644

長辺54cm、短辺44cmの箱棺であるが、箱棺墓2914と異なり、側板と底板はほぞ穴をもつ横木の棧に竹を斜めに交差させて網状に組んだものを巻いて作った、箱というよりは籠状の棺である。検出時には底部と側面の一部が箱状に残存していたが、取り上げ、解体の際に細分化して箱の詳しい遺構造を知ることができなかった。側面、上面も同様に竹を交差させていたものを巻いていた可能性が強いが、残存状況が悪く不明である。

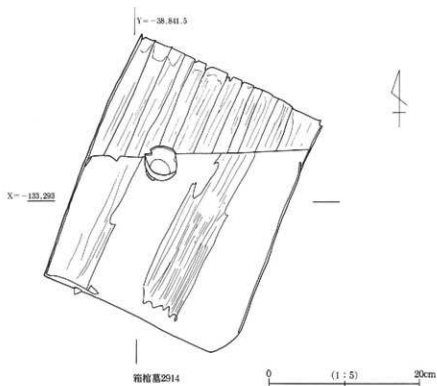
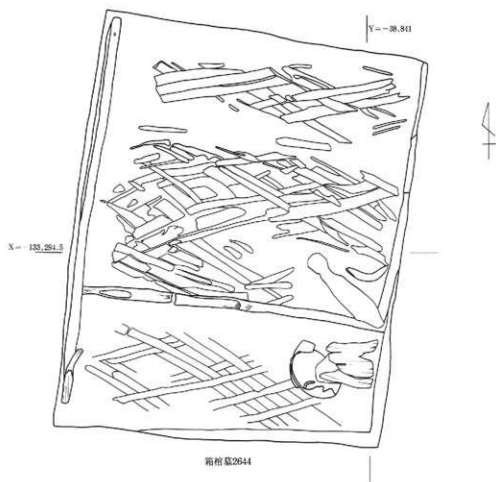
遺物は髪の毛数本と、金属片、漆器碗の一部、銅銭、炭化した玉が出土した。漆器碗は法量を求められるほどには残存していなかったが、外面黒漆塗で体部に赤漆で「**」の文様が入る。内面は赤漆塗である。銅銭は6枚で、その内容は永楽通宝1枚、天聖元宝1枚、元祐通宝1枚、元豊通宝1枚、祥符元宝1枚、治平通宝1枚であった。

墓2938

74×70cmのほぼ正方形の掘方をもつ土坑として検出したが、深さも3cmとわずかである。中央に自然石がおかれてあり、精査したところ六文銭6枚重なった状態で出土したので、人骨等は検出できなかったが墓と判断した。箱棺墓2914・箱棺墓2644と似た大きさの掘形なので同様の棺をもっていたと考えられるが棺材も現存していない。六文銭は宋銭ばかりで、開元通宝1枚、天禧通宝2枚、元豊通宝1枚、熙寧元宝2枚である。

以上の3遺構面にわたって溝・河川の東岸で検出されてきた墓遺構をみてきたが、これらは本来は一群の遺構であったと考えられる。そこで、出土墓の一覧を表にまとめた。(第3表)火葬墓、桶棺墓、箱棺墓のそれぞれが同時期に存在していたのか、やや時期を異にするのかは不明である。中世前期の土葬墓は土器の碗と皿を基本的な組み合わせとし、それに刀子や硯などが付加されるのが一般的である²⁾。火葬墓は出土遺物の土師皿が15世紀より古くなると考えられるものの、それ以外はこれらの墓遺構の年代であるが、副葬されていた漆器碗の型式や、六文銭中に永楽通宝を含むこと、桶棺という埋葬形式が他の出土例と対照して15世紀以降であることなどから考えあわせると、15世紀代に入るものと考えられる。ただ、この周辺一体が墓域として認識、区別されていたことは言えるだろう。

1A区第5遺構面全体の年代を考えると上記の河川2937や墓遺構は14世紀後半～15世紀代を示すが、それ以外の遺構や包含層の遺物は14世紀前半におさまると思われる。河川2937周辺域とその東側の地域では大幅に時期がずれるものを、1つの遺構面として検出したといえる。溝2064・溝2410・河川2937は元来は1つの溝であって、屋敷地を区画する堀の役割をもっていたと考えられる。屋敷地区画堀が時間の経過と共に徐々に形を変えながら埋積していく途中の何段階かを各遺構面で検出したといえる。含まれる遺物の型式より14世紀中頃から15世紀にかけて存続した溝で最終的な廃絶時期は15世紀代と考えられる。



第16图 1 A区第5遺構面箱棺墓2644·箱棺墓2914平面图

第3表 玉櫛遺跡出土器一覧

遺跡名	区・窟位名	形類	形状	規模 長×幅×深(cm)	埋蔵者	棺の規模・ 形状	遺物出土 位置・方位	出土遺物				備考
								土器	漆器	銅 鏡	その他	
土庫0	3AM92R・ NS2II 第3遺構面	土溝墓?	長方形	190×80×34	—	—	南西隅	土器Ⅳ				土器Ⅳ4枚が上向きに重ねてお かれていた
火葬墓244	IAM95I 第3遺構面	火葬墓	長方形	167×127×5	—	—	北東	土器Ⅲ2		1(押符元玉)	炭・人骨	
火葬墓245	IAM95II・IV M95I・III 第3遺構面	火葬墓	正方形	108×102×7	—	—	南西	土器Ⅲ1			刀子・炭・ 人骨	
櫛棺墓254	IAM95I 第4遺構面	土葬墓	円形	55×53×(30)	乳児	20枚の櫛板をわじ り付で止めた櫛箱、 高径35cm	北(頭上と 思われる)	黒漆塗櫛		6(閉元通玉1 型式通玉1 型式通玉1 天輪通玉1 元輪通玉1 型式通玉1)		蓋板もあり。櫛箱の周囲を38本 の竹が刺してあった。
櫛棺墓255	IAM95I 第4遺構面	土葬墓	円形	70×70×(43)	18才前後 の成人(性 別不明)	28枚の櫛板をわじ り付で止めた櫛箱、 高径65cm	西隅(頭上 と想われる)	黒漆塗櫛 底部に「●」の 赤漆 内面赤漆、口縁 部のみ黒く髹		5(押符元玉2 卓床通玉1 型式通玉2)		櫛箱周囲を4本の竹が刺してあっ た。蓋板の状。型。
箱形墓294	IA 第5遺構面	木棺墓	長方形	—	—	何枚かの板を組み 合わせたもの 38×27×8cm	中央	黒漆塗櫛 底部に「型」の字 和漆で径10.2cm、 高1.2cm			玉(炭化) 6	
箱形墓294	IAM95I 第5遺構面	木棺墓	長方形	58×44	—	櫛代板に組み込んだもの を組み立てたもの の54×44cm	北東	外面黒漆塗で赤 漆で「●」状の 文様。内面赤漆		6(赤漆通玉1 天型通玉1 元輪通玉1 元輪通玉1 押符元玉1 胎平通玉1)		炭の毛、 木片、刀 子?
墓298	IAM95I 第5遺構面	土溝墓1	正方形	74×70×3	—	—	—			6(閉元通玉1 天輪通玉2 元輪通玉1 型式通玉2)	石	

5) 第6遺構面の遺構

標準標高が東側ではT.P.4.5m前後であるのに対し、西側ではT.P.4.1~4.3mと西にいくほど緩やかに低くなる地形をとる。

西側では鋤溝と思われる溝数本と井戸、落ち込み状の遺構を検出した。西側部分は耕作地として利用されていたと思われる。

また、調査区中央には溝3593が途中から分岐して溝3594・溝3595となる。溝3595から派生する落込3596は溝3595が氾濫、淀んだ部分からできた遺構と考えられ、多数の遺物が出土した。

溝3595より東側の部分では柱穴が多数集中してみられ、第4・第5遺構面に引き続き掘立柱建物の集落が存続する。

検出時に一つの遺構面として調査したものの、溝3593の西側はレベルも低くなり、14世紀中葉の年代を示す。対して東側は12世紀代の様相を示し、時期の異なる遺構面を一度に検出したことになる。

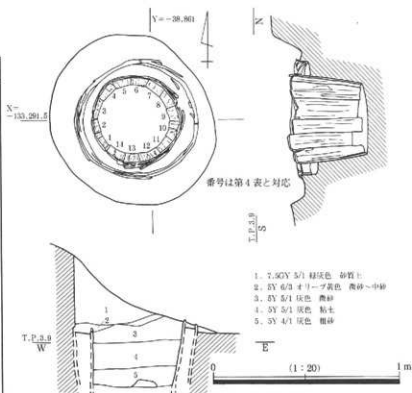
井戸3635

X=-133,291, Y=-38,861で検出された円形の桶板枠を井筒にもつ井戸である。直径80~90cm、深さ70cm程度であったが、落込3015によって上層を削平されており、本来の深さを失っている。

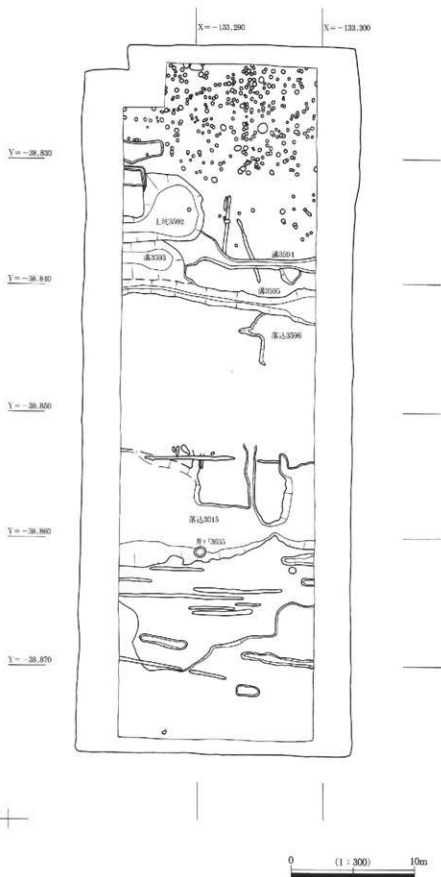
最底部に長さ36~37cm、幅10cm前後の板を14枚並べた直径50cmの桶で井筒をつくっていた。その上部には円形の曲物枠の一部とみられる板を木皮でとじたものが欠損した状態で検出された。上段は曲物枠を、下段は桶枠板を組み合わせた構造の井戸であったかも知れない。井戸内より出土した瓦器類より14世紀中頃の年代を与える。

第4表 井戸3635
井戸枠板計測表

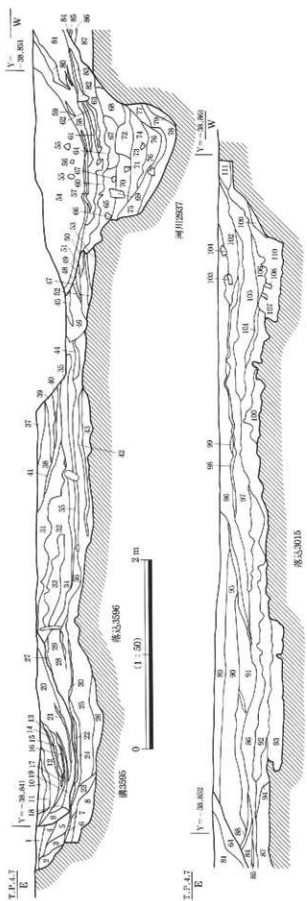
番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	板目
1	33.0	最小 8.8	0.9	桧目
		最大 10.0		
2	37.1	最小 8.4	1.0	桧目
		最大 9.8		
3	33.8	最小 9.2	1.2	桧目
		最大 10.4		
4	36.7	最小 9.8	1.2	桧目
		最大 10.5		
5	36.5	最小 9.4	1.0	桧目
		最大 10.1		
6	36.8	最小 8.5	1.2	桧目
		最大 9.6		
7	36.8	最小 9.1	1.2	桧目
		最大 9.6		
8	36.8	最小 8.7	1.0	桧目
		最大 9.4		
9	36.8	最小 8.5	1.1	桧目
		最大 9.5		
10	36.6	最小 10.3	1.3	桧目
		最大 10.7		
11	36.2	最小 8.2	0.9	桧目
		最大 9.7		
12	36.4	最小 8.5	1.0	桧目
		最大 9.9		
13	33.8	最小 8.6	1.0	桧目
		最大 10.0		
14	37.0	最小 9.6	1.1	桧目
		最大 10.5		



第17図 1A区第6遺構面井戸3635平面・断面図



第18図 1A区第6遺構面平面図



第19図 1A区第6遺構面清3595・落込3596・河川2937・落込3015断面図

- | | | | |
|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|
| 1. 10Y 4.1 褐色 礫層 | 33. 7.3Y 4.1 褐色 礫層 | 65. 3.3Y 3.2 赤褐色 礫層 | 97. 3.3Y 3.2 赤褐色 礫層 |
| 2. 10Y 2.1 赤褐色 礫層 | 34. 3.3Y 2.2 赤褐色 礫層 | 66. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 98. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 |
| 3. 10Y 2.1 赤褐色 礫層 | 35. 3.3Y 2.2 赤褐色 礫層 | 67. 2.50Y 2.1 赤褐色 礫層 | 99. 3.3Y 4.1 灰褐色 礫層 |
| 4. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 36. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 68. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 100. 3.3Y 4.1 灰褐色 礫層 |
| 5. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 37. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 69. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 101. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 |
| 6. 10Y 2.1 赤褐色 礫層 | 38. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 70. 7.3Y 2.2 赤褐色 礫層 | 102. 10Y 2.1 赤褐色 礫層 |
| 7. 10Y 2.1 赤褐色 礫層 | 39. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 71. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 103. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 |
| 8. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 40. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 72. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 104. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 |
| 9. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 41. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 73. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 105. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 |
| 10. 10Y 4.2 赤褐色 礫層 | 42. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 74. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 106. 10Y 4.2 赤褐色 礫層 |
| 11. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 43. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 75. 2.50Y 2.1 赤褐色 礫層 | 107. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 |
| 12. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 44. 2.50Y 2.1 赤褐色 礫層 | 76. 5.6Y 4.1 赤褐色 礫層 | 108. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 |
| 13. 2.50Y 2.1 赤褐色 礫層 | 45. 2.50Y 2.1 赤褐色 礫層 | 77. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 109. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 |
| 14. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 46. 2.50Y 2.1 赤褐色 礫層 | 78. 3.3Y 4.1 褐色 礫層 | 110. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 |
| 15. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 47. 2.50Y 2.1 赤褐色 礫層 | 79. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 111. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 |
| 16. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 48. 2.50Y 2.1 赤褐色 礫層 | 80. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| 17. 10Y 2.1 赤褐色 礫層 | 49. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 81. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| 18. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 50. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 82. 10Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| 19. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 51. 2.50Y 2.1 赤褐色 礫層 | 83. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| 20. 10Y 2.1 赤褐色 礫層 | 52. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 84. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| 21. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 53. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 85. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| 22. 2.50Y 2.1 赤褐色 礫層 | 54. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 86. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| 23. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 55. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 87. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| 24. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 56. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 88. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| 25. 10Y 2.1 赤褐色 礫層 | 57. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 89. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| 26. 10Y 2.1 赤褐色 礫層 | 58. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 90. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| 27. 10Y 2.1 赤褐色 礫層 | 59. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 91. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| 28. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 60. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 92. 2.50Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| | 61. 5.6Y 4.1 赤褐色 礫層 | 93. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| | 62. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 94. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| | 63. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | 95. 3.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | |
| | 64. 7.3Y 2.1 赤褐色 礫層 | | |

落込3596

1 A区の第6遺構面の中心部に位置する溝3595から派生した浅い溝状の落ち込みであり、東西南北とも4m幅で広がる。独立した溝というよりも、溝3594・溝3595から派生して氾濫の結果できた溝のようであるが、溝の南よりの部分で十数本の杭が並ぶ杭列を検出したのでこの杭列は堰の役割を果たしていたものであろうか。多量の土器や木製品が出土した。中でも、口径5.5cm、残存器高8.4cmの瓦質の小壺は注口をもち、肩部に3段の波状の暗文が入れられ、3分の2以上が残存するきわめて珍しいものである。また、板草履芯や下駄が複数点出土しており、一括性も高く良好な資料である。やはり、14世紀中葉の遺構と考えられる。

土坑3592

Y=-38,835の1 A区北端で検出した直径5~6mの円形の土坑である。断面揺鉢状をなし、細かく砂の堆積した複雑な堆積状況を呈する。底部からX字状に交差した2本の杭を検出した。また、II-2~II-3型式の瓦器や、土師器、土師質甕などが出土した。

落込3015

南北端は1 A区全体に広がり、東西端はY=-38,851~Y=-38,863の12mもの範囲に広がる浅い落ち込みである。落込3596と連続していた可能性をもつ。東播系の須恵質こね鉢などが出土した。14世紀前半代の遺構と考えられる。

6) 第7遺構面の遺構

標準標高T.P.4.3mで中央に南北方向の溝3686が走る。やはり溝より東側に柱穴が集中してみられ、土層や出土遺物の年代から考えて、3 A区第5・第6遺構面と対応する遺構面と考えられる。時期的には12世紀前半の遺構面と考える。

溝3686

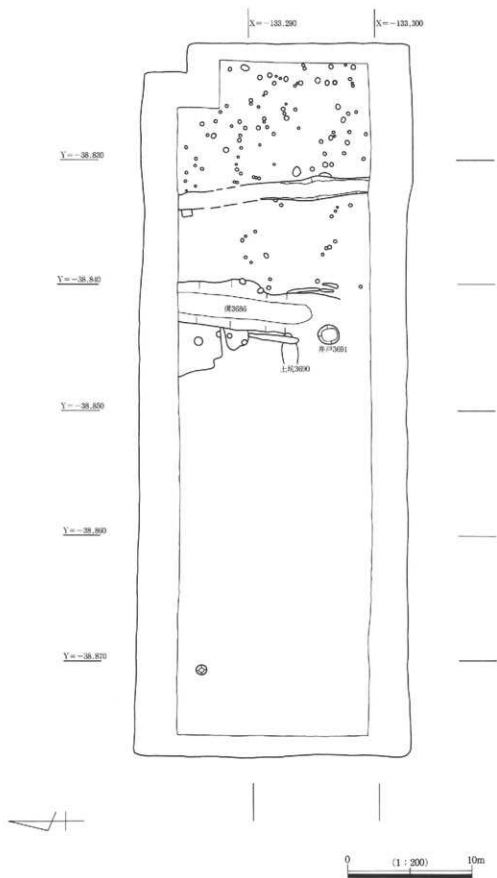
長さ13m、幅3.5mの大溝であり、断面からみる堆積状況からは、踏み込みの痕もみられ、時間をかけて緩やかに堆積したことがうかがえる。深さ60cmである。

土坑3690

直径2.5m、短径1.15mの長円形の土坑であり、ミニチュアの瓦質羽釜などが出土した。第7遺構面全体の時期より新しくなり、上層の遺構であった可能性がある。

註

- 1) 野田繁「玉櫛遺跡遺跡出土の六文銭について」『大阪文化財研究』第11号 1996
財大阪府文化財調査研究センター
- 2) 橋田正徳「中世前期における土葬墓の出土供膳具の様相」『貿易陶磁研究』13号 1993
貿易陶磁研究会



第20图 1A区第7遺構面平面图

(2) 2A区の遺構

1) 第2遺構面の遺構

第2遺構面では調査区全域にわたって、多数の溝や土坑・井戸等を検出した。

第2遺構面のベース土は2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土で、T.P.5.4m前後の高さである。

機械掘削でこの遺構面の上面を幾分掘削した形で人力掘削に入ったため、本来の高さを失い、深さの浅い遺構は形骸化しているものもある。

溝群は幅50～70cm、深さ10～20cm程度のもが多い。溝は南北あるいは東西方向のものがほとんどだが、コの字形をなすものや、斜めに他の溝を横断するものも一部存在する。鋤溝とするには溝の間隔・規模に統一性がない。この溝群の性格は明確に規定し得なかった。

井戸1996

素掘りの井戸で、直径1m、深さ約2mをはかる。

土坑1969

短径1.8m、長径2.9mの長円形の土坑である。深さ約70cmで、断面逆台形をなし、井戸だった可能性も高い。

この遺構面の年代は遺物量が少なく決め手を欠くが、下層遺構面との対応から考えて、14世紀後半以降とする。

2) 第3遺構面の遺構

第3遺構面はT.P.4.6～4.9mの高さで検出した。2.5GY6/1オリーブ灰色砂質土をベース土とし、調査区中央、Y=-38,860付近が最も高く、東側がやや低くなる地形をとる。

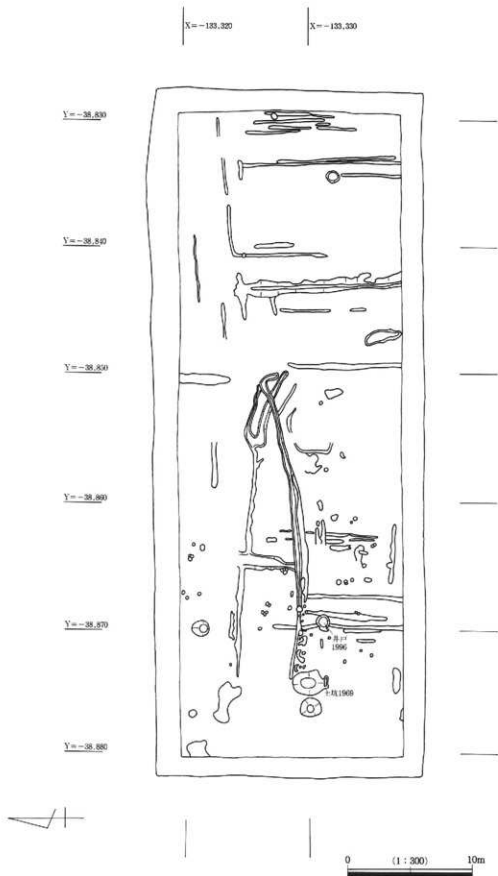
調査区の西端から約2/3、Y=-38,850辺りまでは等間隔の溝で区画される畑の畝状遺構を、それより東側で切り合い関係をもつ河川を2本検出した。

畝および溝状遺構は東西方向の溝2618・溝2620・畝2619で分断されるようにそれより北ではみられない。南北の正方位に幅30cmの溝で区画され、幅1.4m、高さ15～20cmの畝が8本以上形成されていた。途中で間が途切れて幅20cm、深さ5cm未満の鋤溝が10数本南北に走る。畝部分を一部再開発しようとしたものだろうか。ともあれ、耕作地として利用されていた遺構面であることが分かる。

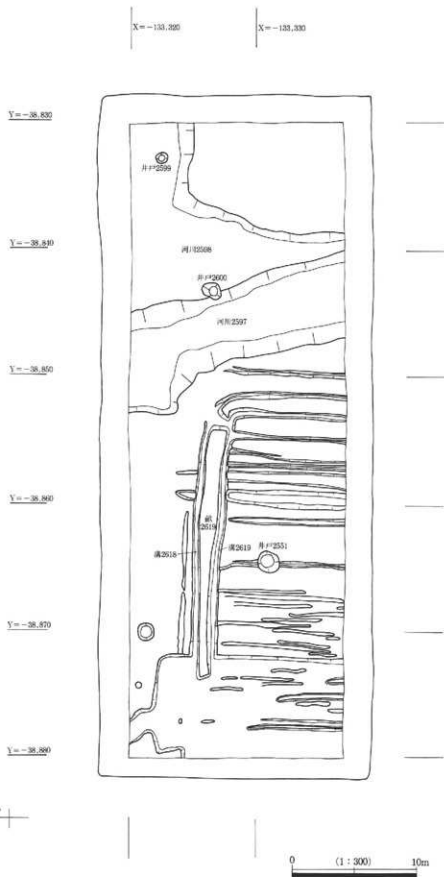
畝・溝以外に数基の井戸を検出したが、井戸2599を除いてはいずれも直径1.3～1.5m、深さ1m強の円形の素掘り井戸であった。後述するが井戸2599のみ桶枠を4段にも重ねた井戸で、規模も他と異なり、時期的に新しくなる可能性がある。

東側の河川2597・河川2598については切り合いをもつが出土遺物から判断すると大きな時期差はないようである。

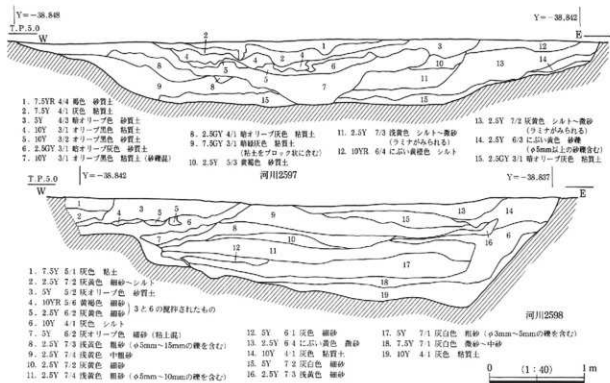
耕作地域の年代決定が難しく、また、井戸2599は上から掘り込まれた近世以降のものである可能性が高いが、河川2597・河川2598および包含層の遺物から判断して、この遺構面は14世紀後半以降15世紀初めの年代と考える。



第21图 2A区第2遺構面平面図



第22图 2A区第3遺構面平面图



第23図 2 A区第3遺横断面河川2597・河川2598断面図

河川2597

2 A区の中央より東側、Y=-38,850辺からやや東にふって流れる河川である。幅6.2m、深さ0.7mをはかる。河川2598と切り合い関係をもつ。一部広がる部分をもつものの、ほぼ直線的に流れる河川である。両端から底部にかけてシルトや砂が流れ込み層状に堆積する自然堆積の状況を示すため、また、肩部から護岸施設の一部と思われる薄板状の木片が多数出土したことから、河川であると判断した。粘板岩製の硯や、白磁Ⅲ類の皿、青磁碗、天目茶碗、瓦質土器などが出土した。出土遺物から14世紀後半から15世紀代の遺構と考える。

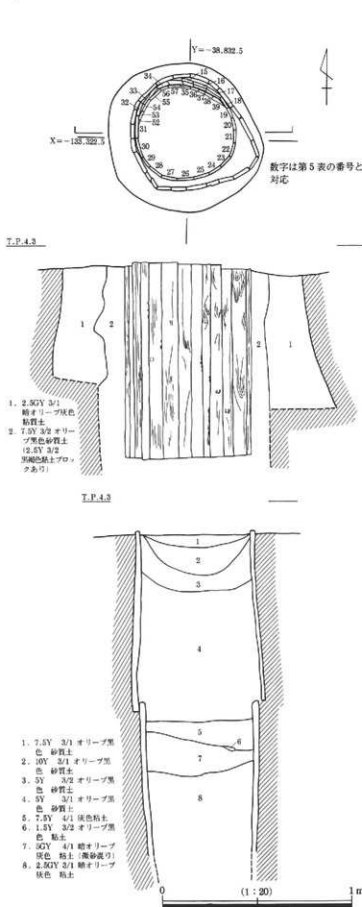
河川2598

調査区北端では東西に広がるが西側は河川2597に切られるため全長は不明である。また、東側の続きも4 A区で検出され得ない。東西の流れに直交する形で南北に延伸し、南端で河川2597と交わっている。幅5.3m、深さ1.1mをはかる。河川2597と同様ラミナのみられる灰色~灰黄色のシルトや細砂で埋積する河川である。終末期の瓦器碗や土師皿が出土しており、14世紀中頃を下限とする年代を示す。河川2597よりは若干古いが14世紀後半から15世紀代の遺構といえる。

河川2597・河川2598共人為的な溝ではなく、自然河川として2 A区の西側に広がる畑状遺構の用水路の役割を果たしたと考える。

井戸2599

2 A区の北東端、X=-133,322、Y=-38,832で検出した桶を4段に組み合わせた井戸である。1段目は土圧のため円形の外観を損なっているが直径約70~80cm、長さが100cm前後、2段目が50cm、3段目以降は直径は不明確であるが、いずれも長さ100cm程度の板を20数枚並べて作った、1段目の内周



第24図 2 A区第3遺構面井戸2599平面・断面・立面図

に2段目を、2段目の内周に3段目といったように4段に積み重ねた、深さ4mにもおよぶ井戸である。3、4段目は掘削に危険を伴うため、機械の助けを借りて引き抜いたので、図示し得なかった。

桶板は格段とも長さ100cm程度、最大幅8~12cm、最小幅5~10cm、厚さ程度の板を、1段目は14枚、2段目は20枚、3段目は23枚、4段目は26枚並べて円形の側板とする。側板同士は側面を木釘で止めた後に撞で締められていたようで、側面の上下2箇所に木釘や痕が、外面には撞の痕跡が残存する。側板の計測値は表にまとめた。長さ100cm、厚さ2cm前後で、上方と下方で1cmほど幅に差があり、下がすばまるように作られている。

1段目の側板中2枚に墨で「〇」状の記号や、4~5文字の文字とも記号ともとれる形跡が残るが判読不能である。井戸を組む際の目印のようなものだろう。表裏面にはのみ状の工具痕が残る。

井戸の掘方は直径80cm程度の円形で、埋土は下層が灰色~オリーブ灰色の粘土が厚く堆積し、上層はオリーブ黒色砂質土である。

遺物は両側に穴をくり抜いた木製品とその穴のうちの1つに先端を通した棒状の木製品が出土した。農具か、釣瓶の一部とも考えられるが、用途は不明である。

井戸2599の正確な時期比定は難しいが、河川2597・河川2598より更に新しく、これまでの出土資料から導ける井戸の形態変遷にあてはめると、近世のものと推定する。第2遺構面では検出できなかったが、第2遺構面あるいはそれより上層より掘り込まれた井戸と考える。